

大雪山国立公園における協働型管理運営体制の構築に向けたワークショップ
(第3回)

〈表大雪地域〉

日時：平成30年12月18日(火) 14:30～

場所：旭川地場産業振興センター 会議室

〈東大雪地域〉

日時：平成30年12月19日(水) 15:00～

場所：十勝総合振興局 会議室

プログラム

開会

1. 大雪山国立公園連絡協議会（総合型協議会）準備会の動き（報告）
2. ワークショップ（第1回、第2回）のふりかえりと課題
3. 今後の取組事項について（本日のワークショップ）
4. まとめ

閉会

資料一覧

〈資料1〉 大雪山国立公園連絡協議会（総合型協議会）準備会の動きについて

〈資料2〉 ワークショップ（第1回、第2回）のふりかえりと課題

〈参考資料1〉 第1回ワークショップの結果

〈参考資料2〉 第2回ワークショップの結果

〈参考資料3〉 大雪山国立公園フォーラム（1月28日開催）について

<資料1>

大雪山国立公園連絡協議会（総合型協議会）
準備会の動きについて
（準備会資料 一部抜粋）

大雪山国立公園連絡協議会（総合型協議会）準備会（第1回）

日時：平成30年11月27日（火）13:00～
場所：上川町保健福祉センター2階ホール

議事次第

1. 開会

2. 議事

- (1) 大雪山国立公園ビジョンの策定に向けた関心事項の洗出しの結果について
- (2) 大雪山国立公園ビジョンについて
- (3) 大雪山国立公園における協働型管理運営体制の構築について
- (4) 大雪山国立公園フォーラムの開催について

3. 閉会

資料一覧

資料1 大雪山国立公園ビジョンの策定に向けた関心事項の洗出しの結果

資料2 大雪山国立公園ビジョン（骨子案）

資料3 大雪山国立公園における協働型管理運営体制の構築に向けて

資料4 大雪山国立公園フォーラムの開催について

参考資料1 新たな大雪山国立公園連絡協議会（総合型協議会）準備会の開催等
今年度の予定

参考資料2 大雪山国立公園ビジョン作成に関する参考資料集

情報交換会での話し合いを想定している

大雪山国立公園連絡協議会（総合型協議会）準備会（第1回） 出席者名簿

	機関・団体名	所属	役職等	氏名	
関係行政機関	北海道上川総合振興局	環境生活課	主査（山岳環境）	福井 拓郎	
		〃	主事	神谷 一太	
	北海道十勝総合振興局	自然生活課	主任	牛嶋 あすみ	
	富良野市			欠席	
	上川町	産業経済課	課長補佐	西木 光英	
	東川町	産業振興課	商工観光振興室長	田渕 浩	
	美瑛町	経済文化振興課	観光振興係長	谷口 雄二	
	上富良野町	企画商工観光課	主幹	上嶋 義勝	
	南富良野町	企画課	商工観光係主任	山下 典晃	
	士幌町	産業振興課		欠席	
	上士幌町	商工観光課	主幹	鶉橋 浩行	
	鹿追町	商工観光課		欠席	
	新得町	産業課		欠席	
	上川中部森林管理署			署長	中澤 文彦
				総括森林整備官	橋本 雅俊
				主任森林整備官	宇佐見 和宏
				地域総括森林官	二階堂 辰也
	上川南部森林管理署			総括事務管理官	佐藤 英典
				森林官	中村 崇
				事務管理官	村上 雅典
	十勝西部森林管理署東大雪支署			欠席	
	北海道開発局	開発監理部	開発専門官	浦澤 英範	
		開発連携推進課			
旭川開発建設部		技術管理課長補佐	前田 章博		
北海道運輸局観光部	旭川運輸支局	局長	佐々木 求		
		首席運輸企画専門官	山角 雄一		
観光協会	(一社) 層雲峡観光協会		事務局長	中島 慎一	
	(一社) ひがしかわ観光協会		代表理事	浜辺 啓	
	(一社) 美瑛町観光協会			欠席	
	(一社) かみふらの十勝岳観光協会		会長	青野 範子	
			事務局長	長田 公一	
	(一社) ふらの観光協会		事務局長	石川 芳	
NPO 法人南富良野まちづくり観光協会		事務局理事	小林 茂雄		
交通事業者	(株) りんゆう観光	層雲峡事業所	所長	山崎 弘二	
	ワカサリゾート (株)			欠席	
	道北バス (株)	運輸部	部長	福内 直樹	
	旭川電気軌道 (株)	運輸事業部	次長	矢野 寿典	
	十勝バス (株)			欠席	
	北海道拓殖バス (株)			欠席	

自然保護団体	大雪と石狩の自然を守る会		代表	寺島 一男
	十勝自然保護協会		事務局長	川内 和博
研究者	北海道大学大学院環境科学研究院		准教授 愛甲哲也	欠席
	北海道大学大学院農学研究院		教授 渡辺悌二	欠席
	北海道大学観光学高等研究センター		特任教授 木村宏	欠席
事務局	北海道地方環境事務所		統括自然保護企画官	大林 圭司
	北海道地方環境事務所	国立公園課	課長補佐	千田 智基
	同 上川自然保護官事務所		首席自然保護官	榊 厚生
	同 東川自然保護官事務所		自然保護官	齋藤 明光
	同 上士幌自然保護官事務所		自然保護官	原澤 翔太

大雪山国立公園のビジョンの策定に向けた関心事項の洗出し結果

国立公園に関する関心事項と将来像（ビジョン）に関する意見照会 概要

1. 照会日

○平成 30 年 9 月 13 日

2. 照会機関、団体等

○関係行政機関、観光協会、交通事業者、自然保護団体、研究者 合計 34 機関・団体等

3. 回答

○回答をいただいた機関、団体等：32

○回答〆切：10 月 9 日

○回答件数

質問 1. 国立公園に関して現状で困っていること（全 101 件）

質問 2. 大雪山国立公園が、このような国立公園であってほしいと思うこと（全 69 件）

質問 3. 国立公園のために自分たちができること、貢献できること（全 62 件）

質問 4. ビジョンの骨子案について盛り込んでほしいこと（全 54 件）

1. 国立公園に関して現状で困っていること（全 101 件）

1. 登山道

- 荒廃と対応：登山道の荒廃が進みその状況も詳細には把握できない（アクセス困難な場所もある）一方、予算不足により対応が困難又は応急的な措置しかできない。
- 標識・施設の老朽化：老朽化しているが再整備が困難。多言語表示ではないため外国人利用者が困り安全の支障になりかねない。大雪山グレードの表示もない。
- 利用者指導・利用者マナー：外国人利用者への利用ルールやマナーの周知不足。ごみ捨てや他の利用者に迷惑をかける行為が依然としてある。
- 登山口へのアプローチ：災害によりたびたび閉鎖してしまう。
- トイレ問題：し尿の散乱。既存トイレのオーバーユースと維持管理の困難。携帯トイレ普及の対象範囲が不明確。新規の携帯トイレブース整備が進まない。
- 閉鎖：災害などで閉鎖している登山道がある。そのような登山道の安全管理。その他災害や故障等で閉鎖したり、管理者不在の施設があったりして、困っている。
- 歩道等維持管理の基盤形成（法令や制度に基づく手続き）：登山道の補修や維持管理に関する手続きの実施。一方、複数の法令や制度があることによる手続きの複雑さ。
- 大雪山グレード：他地域における登山道のグレードとの関係が不明確。設定されたグレードと現実に整備されている施設や利用状況との適切性の評価が不十分。グレードの適用時期についての議論が不十分。
- 利用者負担、民間資金活用、利用者参加の仕組み検討：利用者による負担、維持管理への充当がなされていない。管理運営等の見直し等への市民参加が不十分。
- 遭難：遭難の発生。

2. 利用拠点の活性化

- 廃屋対応：撤去されずに景観を損ねているが、撤去に多額の費用を要する。
- 施設：外国人対応ができる人材が継続して雇用できないと困る。国立公園について紹介する施設が無い。ソフトの開発が不十分。
- 利用可能な資源発掘整備：利用拠点を散策できる歩道が少ない。
- 情報ネットワーク：携帯電話（防災や安心・安全に役立つ）が通じない箇所がある。
- 交通：国立公園内で利用できるバスの車両の維持。災害時の連携や対応。

3. 一元的な情報発信

- 利用者向け情報：利用者に対する広域での発信や広報がない。
- 管理者向け情報：関係機関・団体が閲覧可能な地図情報システム等がない。登山者から情報（登山道の状況・利用実態）を収集する仕組みがない。

4. 管理運営体制

- 協働型管理運営体制：歩道等維持管理作業実施手順マニュアルの位置付けが必ずしも明確ではない。同マニュアルに基づく補修に関する関係者の合意形成が容易ではない。また、登山道情報交換会の位置付けが必ずしも明確ではない。
- 研究調査：調査研究が円滑に行われ、そのデータが蓄積され、活用される仕組みになっていない。

5. 野生生物

- 外来生物：各種外来生物の侵入。
- 人間とのあつれき：車両と野生生物の衝突問題。夜間の照明に対する野生生物への影響の懸念。

6. 外国人利用者の増加

- 標識や案内板の多言語化、インターネット等による外国人利用者に対応した情報発信。マナーやルールの周知。

7. 人口減少と高齢化

- 維持管理を行う担い手の高齢化、減少。

8. 保護と利用のバランス

- 自然景観・自然環境の保護と利用のバランスをどのあたりでとるべきかに苦慮している。

9. その他国立公園全般

- 地域制の国立公園制度、それを前提とした管理運営体制。

2. 大雪山国立公園が、このような国立公園であってほしいと思うこと（全 69 件）

1. 大雪山の優れた価値が共有され世界に発信される国立公園。
2. ブランド化され、イメージが共有された国立公園。
※大雪山の魅力がイメージできる、利用者層の明確化、施設の統一感
3. 国立公園の歩み（過去の議論等）を十分に踏まえて、現在の情勢だけに流されない議論ができる国立公園
- 4-1. 利用者にも負担を求め、それにより施設等の維持管理ができています。管理運営に利用者が参画できる国立公園。
- 4-2. 大雪山グレードの徹底により、多様な利用者が利益を享受できる国立公園。
※高齢者、障がい者、多様な登山レベルの者。
- 4-3. 登山道の補修が進み荒廃がなくなり、多言語による案内板や標識が全域に整備された、管理が行き届いた国立公園。
- 4-4. 登山道に関する法令や制度に基づく手続きへの理解が十分関係者に浸透した国立公園。
- 4-5. 携帯トイレの適正利用、外来種防止対策等歩道の適正利用が推進される国立公園。
5. 一元的な情報発信の体制が整った国立公園。
※利用者に対する、国立公園利用情報発信。利用者からの情報収集。
※自然資源や利用状況のモニタリング体制の構築とデータの蓄積、共有。
6. ガイドツアーへの参加が気軽にできる等、エコツーリズムが充実した国立公園。
7. 外国人対応が充実した国立公園
※豊富なガイドツアー、マナーや登山道情報、外国人受入れの指針と評価。
8. 災害にも対応できる安全・安心が確保された国立公園。
9. 保護と利用のバランスが取れた国立公園。保護の充実が図られた国立公園。
10. 国立公園内の利用施設と、公園外の利用施設が連携して有効活用される国立公園。
11. 管理運営体制が充実した国立公園（調査研究の充実、制度・体制の充実）。

3. 国立公園のために自分たちができること、貢献できること（全 62 件）

1. 国立公園の管理運営に直結する取組の実施

- 登山道の整備、維持管理、植生の回復等の実施や、それらへの参加協力
- 登山道の巡視、普及啓発活動。監視やパトロール
- マイカー規制の実施
- 法令や制度、それらの手続きに関する周知、意見 等

2. 国立公園の保護や利用増進に協力する取組を実施

- 交通の中でのガイドサービス提供、シャトルバス提供、乗車協力
- 日本遺産「カムイと共に生きる上川アイヌ」に関する事業実施を通じた協力。

3. 本業の取組に国立公園の保護や利用増進の観点を付加すること

- アドベンチャートラベル推進、北海道全体のブランド力向上
- 防災減災対策事業、国道管理
- 環境に配慮した使用機材の選定（バス）、作業における環境配慮（ロープウェイ）

4. イベントの開催

- 大雪山大学、フォーラム、シンポジウム、ワークショップ
- ウォーキング、スノーシューツアー

5. 情報発信

- SNS、WEBサイト（ブログ）、パンフレットを活用した発信。道の駅、駅前の観光案内所を通じた発信。
- 地元地域への周知やPR
- 魅力、高山植物の開花日予想、天候、気温、道の情報、植物の様子、注意事項等

6. 国立公園管理運営に対して助言、指導、意見すること

- ビジターセンターの管理運営や展示、大規模開発案件への意見。研究者の橋渡し、魅力開発や人を呼び込むためのアイデア出し。
- 市民や民間の取組を期待するのであれば、具体的な支援を用意すべき。

7. 調査研究を実施すること

- 国立公園と研究機関との連携の再構築。
- 基礎的な自然環境のデータ（降水量、気温、地温等）の収集（観測）。
- 外国人の意向調査。
- 大雪山のブランド醸成に関する研究や啓発。

4. ビジョンの骨子案について盛り込んでほしいこと（全 54 件）

1. 課題について

- 登山道（管理者の不在）、気候変動、一元的な情報発信、野生生物等の事項が挙げられた。

2. 大雪山国立公園が持つ優れた価値

- 大雪山国立公園の価値を改めて整理する必要があるとの意見があった。

3. 目指す姿

- 各立場からそれぞれの目指す姿について意見が出されたが、未来に向けてメッセージ性のある文言を入れるべき、具体的でイメージしやすい内容にすべきとの意見があった。

4. ビジョンを実現するための取組方向性、内容

- ビジョンを実現するための手段となる、個別の取組について、多くの意見をいただいた。
- 登山道、一元的な情報発信、エコツーリズムによる活用、利用拠点の活性化、安心・安全、外国人利用者増加への対応、地域社会の解決にも寄与する国立公園、管理運営体制に関する意見が挙げられた。

大雪山国立公園ビジョン【骨子案】

＜策定主体：大雪山国立公園連絡協議会（総合型協議会）＞

1. 大雪山国立公園の優れた価値と歩み

- (1) 大雪山国立公園の優れた価値
- (2) 大雪山国立公園の歩み

※指定以前からの先駆的な取組、戦後の歴史、平成 19 年管理計画における将来像設定まで

2. 大雪山国立公園の現状と課題

- (1) 大雪山国立公園に影響を与える自然的・社会的環境
 - 1) 気候変動
 - 2) 人口減少と高齢化、ライフスタイルの変化、価値観の多様化
 - 3) 外国人利用者の増加

- (2) 大雪山国立公園の課題

- 1) 登山道を中心とした山岳地域の荒廃
※登山道の荒廃、関連施設の老朽化、野外のし尿の散乱。
※山岳地域＝大雪山グレード適用登山道及び周辺地域。
- 2) 利用拠点の低迷

3. 大雪山国立公園の目指す姿

- 「地域で支える大雪山 世界を魅了する Daisetsuzan」
- 「カムイミンタラ みんなの力で未来につなぐ」
- 「まもり、活かし、つなげよう 世界に誇る大雪山」

- (1) 大雪山国立公園の優れた価値の世界との共有
- (2) 大雪山グレードに応じた保全と利用の実現と荒廃の解消
- (3) 質の高いエコツーリズムを核としたにぎわいの創出
※大雪山の資源の強み（温泉・峡谷・湖・雪）を活かす
※自然環境の価値を損なわない範囲での持続的で質の高い（満足度の高い）利用（ワイズユース）

⇒ 地域社会の課題解決に寄与する国立公園

4. ビジョンの実現に向けて

- (1) 取組の方向性と具体的取組の実施に向けて（別添の説明）
- (2) ビジョン達成目標年

別添 ビジョンを実現するための取組例

※ビジョン策定後に作成される管理運営計画における管理運営方針、風致景観及び自然環境の保全に関する事項、適正な公園利用の推進に関する事項に反映

1. 目指す姿を実現するための取組

(1) 大雪山国立公園の優れた価値の世界との共有

- 一元的な情報発信（登山者向け、観光利用者向け。公園内外の連携やプロモーションの促進を含む）

(2) 大雪山グレードに応じた保全と利用の実現と荒廃の解消

- 適切な歩道維持管理のための基盤形成（歩道全区間の事業執行等）
- 大雪山グレードに応じた歩道の補修等維持管理の促進
- 歩道関連施設の整備、更新
- 歩道の適正利用（大雪山国立公園携帯トイレ普及宣言を含む。）
- 利用者負担、民間資金活用、利用者参加の仕組み検討

(3) 質の高いエコツーリズムを核としたにぎわいの創出

- エコツーリズムによる資源の活用
- 利用可能な資源の発掘、整備（ワイズユースの範囲内）
- 利用拠点の満足度向上
- 安心・安全の確保

※ (2) 山岳地域 (3) 各利用拠点の共通事項

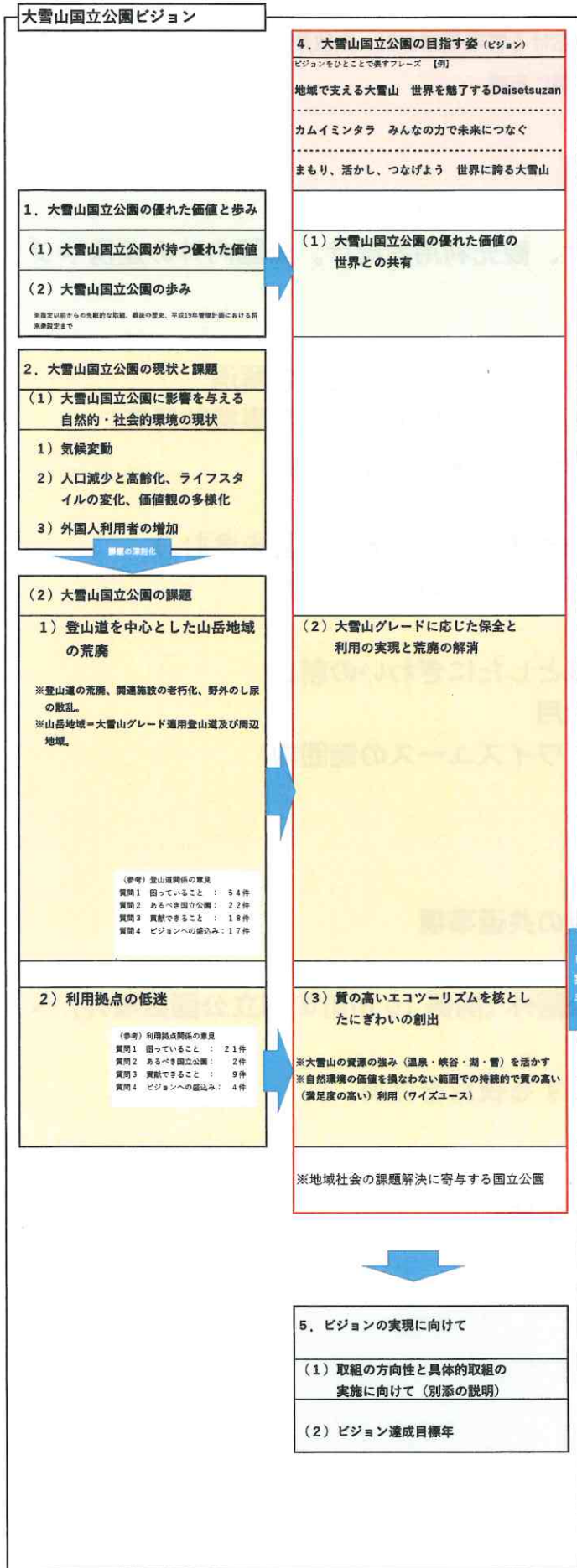
- 外国人対応の充実
- モデル的な事例づくりと国立公園外（関係 10 市町の国立公園区域外）への普及
- 構成員の本業で国立公園に貢献する視点を付加

2. 取組を支える管理運営体制

(1) 協働型管理運営体制の構築と維持

(2) 調査・研究の推進とデータの活用

【参考資料】大雪山国立公園のビジョン骨子の構成



別添 ビジョンを実現するための取組例

※管理運営計画における管理運営方針、風致景観及び自然環境の保全に関する事項、適正な公園利用の推進に関する事項に反映

<目指す姿を実現する取組>	
取組の方向性	具体的取組
一元的な情報発信	<ul style="list-style-type: none"> 登山者向け情報発信 観光利用に関する総合的な情報発信、窓口の検討と構築
	<ul style="list-style-type: none"> ※いずれも、リアルタイムで各管理者が最新の情報を更新 公園内外の連携、プロモーションの促進 関係機関・団体によるイベントの連携
適切な歩道維持管理のための基礎形成	<ul style="list-style-type: none"> 歩道区間の事業執行（管理者の設定）、そのための役割分担の検討、適正な手続の実施 大雪山グレート圏と支那との差異の洗い出し 登山道維持管理データベースの構築（利用者からの情報収集含む）
大雪山グレート圏に応じた歩道の補修等維持管理の促進	<ul style="list-style-type: none"> 補修等の大規模な促進（利用者負担、民間資金の活用） 歩道等維持管理作業実施手順マニュアルの活用（登山道整備技術指針に基づく質の高い補修） 補修技術向上のための人材育成（研修実施等） 一般向けの補修イベントの開催を通じたファン（多様な主体の参画）
歩道関連施設の整備、更新	<ul style="list-style-type: none"> 老朽化した案内板、誘導標識、遊歩小道、トイレ等の更新（大雪山グレート圏表示、多言語化）や、大雪山グレート圏に基づく適切な配置（利用者負担、民間資金の活用）
歩道の適正利用	<ul style="list-style-type: none"> 登山口へのアプローチの確保 大雪山国立公園携帯トイレ普及宣言の推進 利用ルール、マナーの啓発（適切な情報提供等）
利用者負担、民間資金活用、利用者参加の仕組み検討	<ul style="list-style-type: none"> 大雪山に連した利用者負担と、歩道や関連施設の維持管理への充実に資する具体的なあり方検討 民間資金（事業者等からの寄付）の受入れ体制の明確化 一般向け補修イベントへの実施、利用者による登山道や自然環境情報収集の仕組み等、管理運営への利用者参加
エコツーリズムによる資源の活用	<ul style="list-style-type: none"> ガイドの育成（外部協賛、エンターテイメント性、エコツーリズム・アドベンチャーツーリズムへの対応、顧客への利用ルールやマナーの啓発）
利用可能な資源の発掘、整備（ワイズユースの範囲内）	<ul style="list-style-type: none"> 既存の施設（湯池、散策路等）やフィールドの有効活用とそのためのプログラム開発 高付加価値型のエコツーリズムの展開 廃屋の撤去と再整備に関する検討
利用拠点の満足度向上	<ul style="list-style-type: none"> マイカー規制の取組継続、利用中長期の遊覧維持と取組の新たな検討実施、
安心・安全の確保	<ul style="list-style-type: none"> 情報ネットワークの確保 ハザードマップの活用
山岳地域、各利用拠点の共通事項	
外国人対応の充実	<ul style="list-style-type: none"> 外国人の受け入れ指針の設定や評価満足度
モデル的な事例づくりと国立公園外（圏域10市町の国立公園区域外）への普及	<ul style="list-style-type: none"> 例えば、利用者参加の管理運営の仕組みを、地域の交流人口、定住人口の拡大に活用 確立した大雪山ブランドを各市町で観光振興に活用
構成員の本業で国立公園に貢献する視点を付加	<ul style="list-style-type: none"> 本業の取組に国立公園ビジョン実現の視点を付加 本業の取組の中で国立公園の管理運営に協力
取組を支える体制	
<管理運営体制>	
取組の方向性	具体的取組
協働型管理運営体制の構築と維持	<ul style="list-style-type: none"> 大雪山国立公園連絡協議会を総合型協議会に拡充（環大雪山の連携）。 登山道維持管理部会を設置し、専門的な検討を実施。 ビジョンに基づく取組事項に関する具体的な行動と評価の実施（有効な管理ができていないかの評価）
調査・研究の推進とデータの活用	<ul style="list-style-type: none"> 大雪山国立公園連絡協議会HP内に、調査、研究、各種報告、会議資料を集約したデータベースの構築（協議会構成員（管理者等）向け情報発信） 先端技術（ICT、ドローン）等の有効活用事例検討 技術利用上の問題点（特にドローン）や対応の検討 気候変動、外来種、野生生物に関して必要なモニタリングや対応の検討、役割分担、実施

ワークショップ(第1回、第2回)の ふりかえりと課題

平成30年12月18日(火):表大雪会場

平成30年12月19日(水):東大雪会場

上川自然保護官事務所
東川自然保護官事務所
上士幌自然保護官事務所

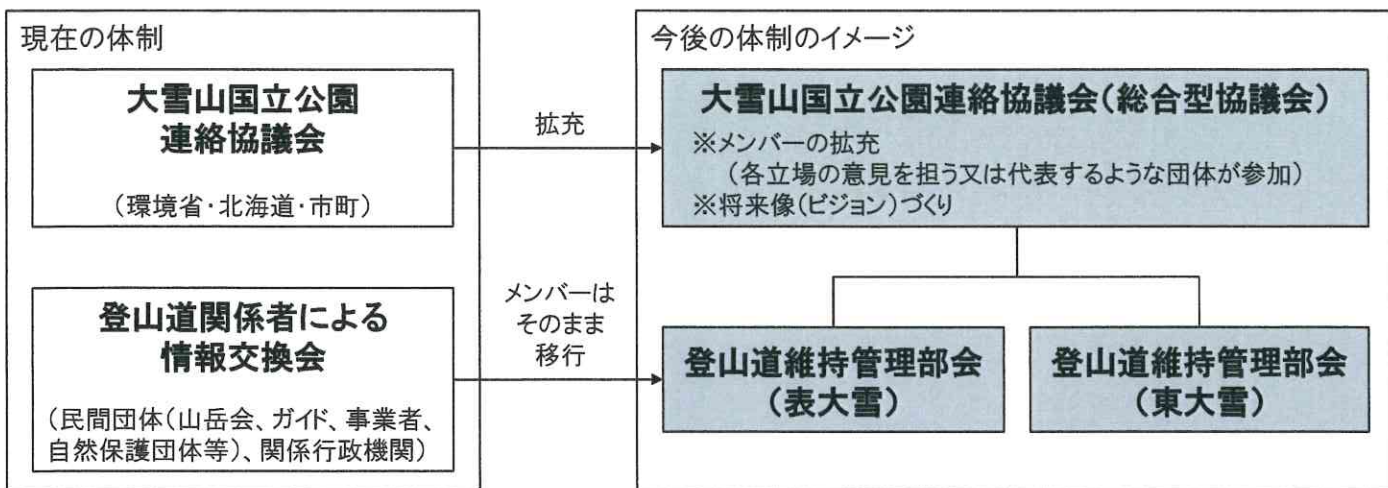
(1) ワークショップ(第1回、第2回)のふりかえり

大雪山国立公園の
管理運営における課題

- ①登山道の荒廃、野外のし尿の散乱といった課題
- ②川、湖沼、温泉、峡谷等の自然資源の利活用や外国人の対応に関する課題
- ③これらの取組を行うための一元的な合意形成と情報発信体制

課題解決に向けて

新たな協働型管理運営体制(案)



協働型管理運営体制とは

- 国立公園に関する環境省以外の国の機関、自治体、民間団体、公園事業者など多様な主体が参画する総合型協議会を中心とする体制
- 国立公園の将来像(ビジョン)、国立公園の管理運営方針や行動計画を定める体制
- 全国の国立公園で準備が整い次第、この体制を構築すること(平成26年7月7日付 環境省自然環境局長通知)

ワークショップ^(第1回、第2回)のふりかえり

■第1回ワークショップ（平成30年3月）

●テーマ・参加者への問いかけ

新たな協働型管理運営体制に、民間団体がどのようにかかわるか？



●結果

登山道の維持管理や利活用について、今後行うべき取組に関する意見が多数出た。

登山道のことに関心が高い

登山道を通じて協働型管理運営体制に関わりたい

大雪山国立公園における新たな協働管理運営体制(案)

<ポイント>

- ①現在の大雪山国立公園連絡協議会のメンバーを拡充し、総合型協議会として位置づけ(大雪山国立公園のビジョンや課題解決のための方針や計画について関係者で協議)。
- ②総合型協議会の下に地域別に登山道維持管理部会を設置する(登山道等の維持管理のための調整や合意形成)。
- ③大雪山全体を活動範囲とし、かつ民間資金の受け皿となるような公園管理のための民間団体の育成を目指す。

大雪山国立公園連絡協議会(総合型協議会)

*大雪山の場合ステークホルダーが多いので、例えば「宿泊施設の意向については観光協会が代表する」などの関係者間の関係を明らかにする。
*土幌、上土幌、鹿追、新得の観光協会は役場に同じ

- <役割> 国立公園のビジョン作成
国立公園の利活用や保全上の課題の解決についての方針・計画作り
- <メンバー> 環境省、北海道、1市9町(上川町、東川町、美瑛町、上富良野町、富良野市、南富良野町、新得町、鹿追町、土幌町、上土幌町)
関係行政機関(上川中部森林管理署、上川南部森林管理署、十勝西部森林管理署東大雪支署、北海道開発局、北海道運輸局)
観光関係者(ふらの、層雲峡、ひがしかわ、美瑛、かみふらの十勝岳、南富良野まちづくり各観光協会)
ロープウェイ事業者 ・バス事業者 ・国立公園管理の中核を担う民間団体
自然保護団体 ・研究者 ・ビジターセンター関係者 ・登山道維持管理部会参加者(代表)

<幹事会>
担当者による
連絡調整

- <協議課題> ①国立公園のビジョン、利活用、課題解決のための方針・計画づくり
「大雪山国立公園携帯トイレ普及宣言」パートナーシップ事業開始(2018年目標)
「大雪山国立公園ビジョン」の作成(2020年公表目標)
・山岳地域の上質な空間の保全(大雪山縦走路の活用) ・利用可能な資源の開拓、高付加価値のツーリズムの展開 ・利用拠点の活性化
・公園内外の連携、プロモーション促進(ターゲットとそれに応じた利用メニュー開発) ・外国人登山者の適切な利用促進に向けた活動
・利用者負担(協力金)のあり方検討
「大雪山国立公園管理運営計画」策定(2020年作成目標)
「大雪山国立公園登山道管理水準」改訂(2021年作成目標) 「大雪山国立公園における登山道整備技術指針」改訂(2021年作成目標)
②登山道維持管理部会の設置
③情報の一元化と情報発信(民間団体が育成されるまでの当分の間)

必要に応じた作業部会

- <役割> 方針・計画づくりに関する実質的な議論
- <メンバー> 総合型協議会メンバーから
手上げ方式により選出
*議論の内容によってはメンバー外の出席を求め、意見を聴くことができる。

<予算> 1市9町からの負担金(従前の大雪山国立公園連絡協議会の負担金の金額を変更せずに継続)

<事務局> 環境省(業務の一部を民間団体に請負)

<事務局> 環境省

取組結果報告

部会設置・検討指示

表大雪登山道維持管理部会(※)

- <役割> 登山道等の維持管理活動に関する総合調整と合意形成
- <メンバー> 国立公園制度:環境省 ・土地所有者:森林管理署、北海道
歩道事業執行者・関係市町:北海道、1市5町(上川町、東川町、美瑛町、上富良野町、富良野市、南富良野町)、りんゆう観光
国立公園管理の中核を担う民間団体
山岳会関係者 ・ガイド事業者 ・ビジターセンター関係者
保全活動団体(パークボランティア等) ・整備の専門家
研究者、自然保護団体 等
- <活動内容> ①維持管理活動のPDCAサイクル実施と検証
・歩道等維持管理実施手順マニュアルに基づく関係者間の調整、作業結果の検討
・活動の広報、人材育成(セミナー、ボランティア受入)、技術の蓄積と伝承
②登山道等維持管理の適正化に向けた議論
・歩道事業未執行区間の解消
・施設の老朽化対策

<事務局> 環境省(業務の一部を民間団体に請負)

東大雪登山道維持管理部会(※)

- <役割> 同左
- <メンバー> 左の中で東大雪に関わる者と関係4町(新得町、鹿追町、土幌町、上土幌町)
- <活動内容> 同左

<事務局> 同左

<解説>

- 総合型協議会において、登山道の荒廃と対応を重要課題として位置付ける。
- 総合型協議会において、登山道維持管理部会を設置し、登山道に関する専門的な検討を行うように指示する。
- 検討の結果を、登山道維持管理部会の参加者(代表者)が、総合型協議会に出席して報告する。
- 総合型協議会に出席した代表者は、協議事項に対して、登山道の維持管理の専門的な立場から意見を述べる。

(※) 総合型協議会とは独立並行して準備を進め、両方が成立した時点で協議会とその部会との関係になることも想定。
個別の事業者は各立場を代表する団体に出席をゆだね、オブザーバーとなるように推奨。

ワークショップ (第1回、第2回) のふりかえり

■第2回ワークショップ (平成30年6・7月)

●テーマ・参加者への問いかけ

登山道維持管理部会で行いたい取組

●結果 (出された意見)

- 情報の発信、共有
 - ・管理者、関係者間での共有
 - ・利用者に向けての情報発信
- トイレ問題への対応
- 施設 (避難小屋等) の老朽化対策、維持更新
- 部会での課題解決の進め方
 - ・課題の洗出し、優先順位付け
 - ・P D C Aサイクルによる取組の実施
- 部会の運営
 - ・目的や理念の共有
 - ・組織体制の詳細決定

**登山道維持管理部会として取組を行うことに
積極的な人がいる一方、
イメージが湧かない・積極的になりにくい人も**

今後の取組について (本日のワークショップ)

今まで出た意見の中から 新しい取組を初めてみませんか？

- 単に情報を交換するだけでなく、議論や意思決定、登山道維持管理部会が総合型協議会に参加することを前提に、現在ある資源・人材を活用して、可能な範囲の取組みを試験的に実施していきませんか。
- 本日のワークショップでは、登山道に関わる意見の中で「重要な事」と「やれそうな事」について皆様の意向を伺いたいと思います。

本日のワークショップの進め方

1. 第2回のWSで出された意見の中から、「重要な事」と「やれそうな事」を選んでいただきます。
2. 「重要な事」3つに ● を投票してください。
3. 「やれそうな事」3つに ● を投票してください。

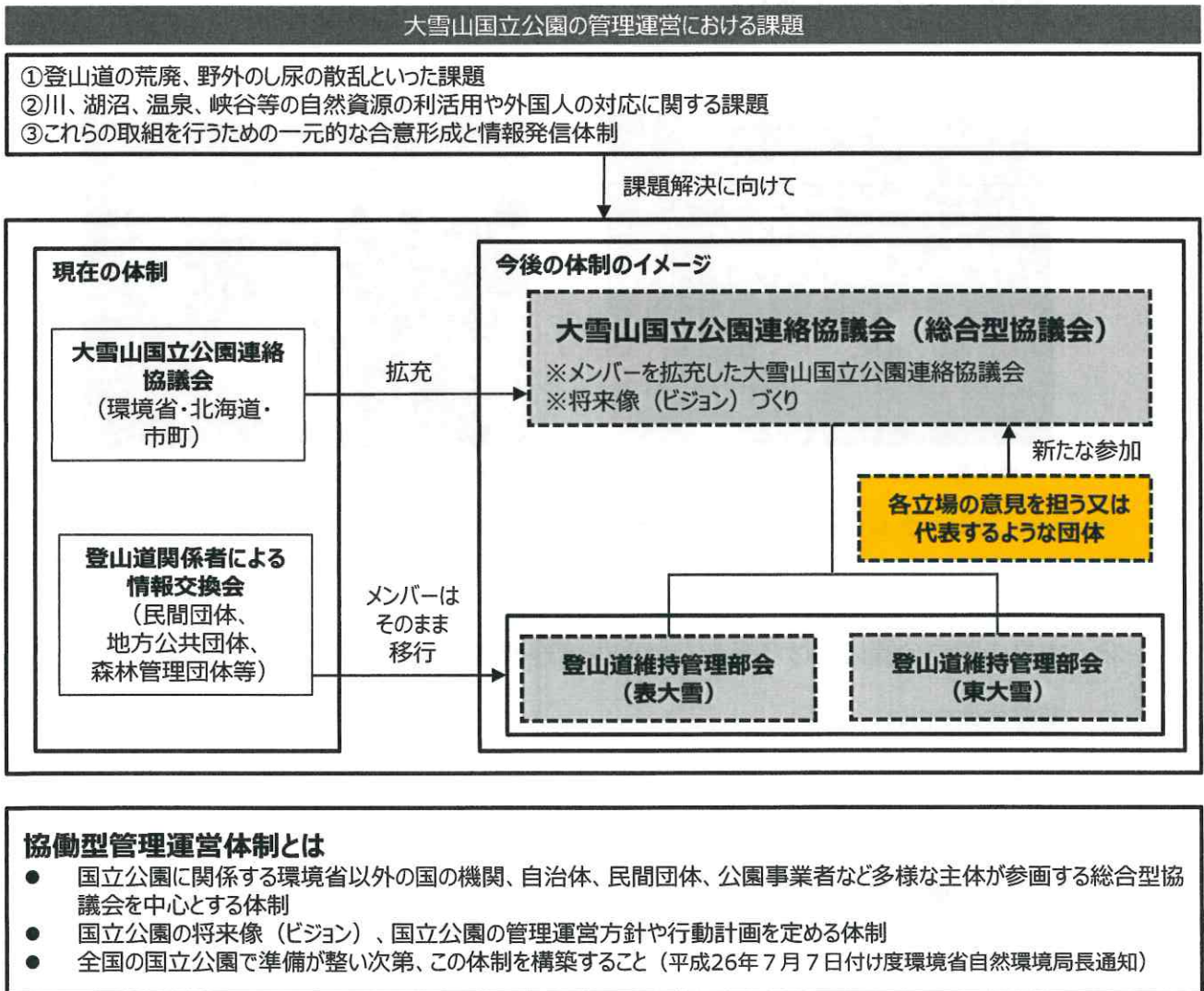
大雪山国立公園における 協働型管理運営体制の構築に向けて 民間団体の皆様の関わり方と対応を考えるワークショップ 開催結果

環境省上川・東川・上士幌自然保護官事務所

ワークショップ開催の趣旨と目的

北海道地方環境事務所では、大雪山国立公園の管理運営における課題の解決を大きく前進させるため、既存の大雪山国立公園連絡協議会を「総合型協議会」に拡充し、その下に「登山道維持管理委員会」を設けることで、産学官民の参加による協働型管理運営体制を構築したい考えです。（下図）

大雪山国立公園の管理運営や利用状況を踏まえると、協働型管理運営体制に、登山道の整備や維持管理、登山利用、ガイド利用をされている民間団体の皆様に参画いただくことは不可欠です。そこで民間団体の皆様が、協働型管理運営体制にどのように関わり対応していくべきかを考えるワークショップを行いました。



ワークショップの内容

ワークショップは3回程度（自由な意見・アイデア出し→論点整理と議論→とりまとめの三段階）を想定し、第1回では最初の「自由な意見・アイデア出し」の部分を実施しました。

ワークショップ参加者

主に表大雪および東大雪登山道関係者による情報交換会にご出席の、行政を除く民間団体の方々に参加を呼びかけました。また、大雪山国立公園の協働型管理運営体制に関する有識者にご参加いただきました。

ワークショップ開催日時・場所・参加者

	開催日時	開催場所	参加者数
表大雪地域	平成30年 3月7日(水) 13:30~16:30	上川総合振興局 3F講堂 (旭川市)	27名 ・民間団体25名 ・学識経験者2名 (27名を2グループに分け実施)
東大雪地域	平成30年 3月15日(木) 13:30~16:30	とかちプラザ 403会議室 (帯広市)	11名 ・民間団体9名 ・学識経験者2名 (11名1グループで実施)

【配布資料】

ワークショップ次第

資料1 参加者名簿(地域別の名簿)

資料2 ワークショップ開催要項

資料3 大雪山国立公園における協働型管理運営体制の構築に向けて

(補足資料) 大雪山協働型管理運営体制図案、協議会・部会メンバーリスト案

資料4 ワークショップの進め方



表大雪地域のワークショップの様子



東大雪地域のワークショップの様子

当日のプログラム(表大雪地域、東大雪地域共通)

1. 開会
2. 大雪山国立公園における新たな協働型管理運営体制の構築に関する説明(30分)
3. 質疑応答20分
休憩(10分)
4. ワークショップその1(45分)
新しい協働型管理運営体制について、民間団体としての「心配や関心事」・「今後参加が必要と思われる人や団体」・「運営に関するアイデア」などの意見出しと発表
5. ワークショップその2(45分)
協働型管理への参画について、各民間団体からの「参画への心配事」・「参画のためのより良い環境とは」・「新しく試みたいこと」などの意見出しと発表
5. ワークショップまとめ(20分)
ワークショップ全体のまとめとして有識者からのコメント
(表大雪地域:愛甲先生・木村先生)(東大雪地域:愛甲先生・渡辺先生)

ワークショップの結果・全体のとりまとめ

表大雪地域・東大雪地域の地域に関係なく共通する意見と、地域ごとの意見がわかるように地域・項目ごとに、主な意見を比較し記載しました。

今回ワークショップに参加した民間団体は、大雪山国立公園の高山帯（特に登山道）の維持管理や利活用に携わる団体が多いため、それらの課題や今後の取組について具体的な意見が出され、今後も議論を深めることができる可能性があると考えられます。また、総合型協議会については山麓部や登山道の利活用以外の分野の話題も含むため、協働型管理運営体制に対する関わり方が現時点ではイメージしにくいものと考えられました。

今後は、今回ワークショップに参加した民間団体の得意分野を活かせるような、協働型管理運営体制への関わり方を検討していくことが重要であると感じました。

WS1：「新しい協働型管理運営体制」についての両地域共通の意見と地域ごとの主な意見

	両地域共通の意見		
		表大雪地域の意見	東大雪地域の意見
心配や関心事	<ul style="list-style-type: none"> 新しい協働型管理運営体制についてイメージができない 	<ul style="list-style-type: none"> 管理側の高齢化や将来的な人材育成 新しい体制の資金面(予算)の裏付け 	<ul style="list-style-type: none"> 行政体制への疑問 アクセス道路の不通箇所について 携帯トイレブースの促進 現場での具体的問題と体制の結びつきがわからない
今後参加が必要と思われる人や団体	<ul style="list-style-type: none"> 一般登山者 近郊都市の関係者 	<ul style="list-style-type: none"> 地元農家 アウトドア事業者 アイヌ民族 試案メンバーで十分 	<ul style="list-style-type: none"> 動物専門家 地元教員 表大雪メンバー
運営に関するアイデア	<ul style="list-style-type: none"> 総合型協議会や登山道維持管理部会への民間団体の関わり方について 	<ul style="list-style-type: none"> 協力金・基金等の活用 運営や情報発信について 	<ul style="list-style-type: none"> 議論の内容の具体化 フォーラムの開催 表大雪地域との合同情報交換会

WS2：「協働型管理運営体制への参画」についての両地域共通の意見と地域ごとの主な意見

	両地域共通の意見		
		表大雪地域の意見	東大雪地域の意見
参画への心配事	<ul style="list-style-type: none"> 高齢化や人材育成について 団体の負担増加に対する懸念 	<ul style="list-style-type: none"> 意見の集約ができるか 	<ul style="list-style-type: none"> 体制が継続して機能していくか
参画のためのより良い環境とは	<ul style="list-style-type: none"> 参画しやすい体制づくりと参加者の立場の明確化 	<ul style="list-style-type: none"> 情報発信と共有 管理団体一元化 	<ul style="list-style-type: none"> 許認可の簡素化
新しく試みたいこと	<ul style="list-style-type: none"> 民間資金の調達 SNSでの情報共有・発信、情報の一元化 	<ul style="list-style-type: none"> 議論を効率的に行う運営メンバーの設置 	<ul style="list-style-type: none"> 外国人対応

表大雪地域ワークショップの記録

日時:平成 30 年 3 月 7 日(水) 13:30~16:30

場所:上川総合振興局 3F 講堂 (旭川市)

平成29年度 大雪山国立公園における協働型管理運営体制の
構築に向けて民間団体の皆様の関わりと対応を考えるワークショップ
参加者一覧

	所属	氏名
1	旭岳ビジターセンター	菊地 基
2	大雪山国立公園パークボランティア連絡会	黒田 忠 立原 祥弘
4	旭川山岳会	狩野 明美
5	上川山岳会	澤崎 新一
6	美瑛山岳会	内藤 美佐雄
7	(有)風の便り工房	佐藤 文彦
8	NPO法人大雪山自然学校	小沼 秀樹
9	合同会社北海道山岳整備	岡崎 哲三 下條 典子
10	大雪と石狩の自然を守る会	寺島 一男 関口 隆嗣
11	ガイドオフィス風 北海道山岳ガイド協会表大雪地区	羽鳥 晃一
12	東川エコツーリズム推進協議会	大塚 友記憲
13	大雪山倶楽部	愛澤 美知雄 沓澤 克嘉
14	NPO法人かむい	濱田 耕二
15	日本山岳会北海道支部	藤木 俊三
16	北海道勤労者山岳連盟（道央地区）	伊吹 省道
17	NPO法人アース・ウインド	横須賀 邦子
18	層雲峡ビジターセンター	片山 徹 佐久間 弘
19	NPO法人 ezorock	高橋 苗七子 伊藤 陽平 伊藤 早穂 菅原 圭祐
20	北海道大学大学院 農学研究院	准教授 愛甲 哲也
21	北海道大学 観光学高等研究センター	特任教授 木村 宏

◇ 表大雪地域ワークショップ

WSの結果として、質疑応答の内容、WSでの意見だしの結果、WSのまとめ（学識経験者のコメント）を以下に示す。

質疑応答

- 岡崎氏 今回のWSの趣旨は、今まで環境省や森林管理署が行ってきた整備や管理体制に限界があり、今までの管理の体制や方向性をガラッと変えてやっていくという前提で皆さんから話を聞きたいと理解していいのか？
- 榊自然保護官 現在の法制度に基づく管理方法が変えられるわけではないが、大雪山の管理運営全体を考える際に、今までと違い、より多くの立場の人が関わって方向性を考えていく形にしたいと考えている。
- 岡崎氏 今までの管理の問題点や行き詰まりの原因を考えなければならないと思っている。いずれにしても管理方法に関してはアイデアがあるので出していきたい。
- 寺島氏 今までの管理運営は官が中心であったが、今回の説明のように広範に民間を入れることは評価したい。ただ大雪の問題の背景に関しては、この先の人口減少、高齢化、利用の変化など社会的背景の時間軸の分析も必要と思っているのでもう少し掘下げが必要かと感じた。
- 榊自然保護官 ご指摘のように国立公園の管理運営に関係する社会状況のこれまでの変化、今後の変化を考慮する必要はあると思う。議論の素材にできる資料を整理していきたい。
- 菊池氏 管理運営の話しが、夏期を中心としているようだが、積雪期の利用に対する管理をどうするのか、特に安全対策や救助体制などに関して議論していく必要があると思う。
- 榊自然保護官 確かに、積雪期の利用と管理に関しては今まではあまり検討されていなかった点であり、総合型協議会で議論できるものと考えている。
- 横須賀氏 課題が多岐にわたっているので、今後2回のWSで収まるのか？と感じている。大切なのは、「大雪山をどう利用していくのか」と言う点で、意見だしだけではまとまるのかどうか心配である。
- 榊自然保護官 こうしたことはまさに総合型協議会の大雪山ビジョンの議論の中で取り上げて、一定の方向性を出していくべきもの。今回は、その議論の場をどのように設定し、皆さんがどのように関われるかについての意見をいただきたいと思っている。
- 黒田氏 今後の1市9町の負担金を教えて欲しい。
- 榊自然保護官 大連協では毎年総額で約100万円程度が1市9町から負担金として支払われている。今後もこの負担金の額を変えずに進めていくことで市町には説明を既に行っているところである。
- 黒田氏 山守隊の活動等に対して材料費などが出る余地はあるのか？
- 榊自然保護官 協議会の負担金からは出し難いが、他の資金源を確保してそうしたことに充てるにはどのようにしたら良いか議論はできると考えている。
- 黒田氏 今、市町村は何処も予算の余裕が無く、今後の活動といっても予算の裏付けがないと進まないのかなと思って質問した。
- 愛甲先生 皆さんが説明でちゃんと理解できているのか少し心配している。協働型管理運営体制や総合型協議会のイメージとして先進事例を紹介してもらおうと、WSでの意見だしが

楽になるのではないかと思います。

今は手元資料にないが、協働型管理体制としては世界自然遺産の知床国立公園や尾瀬国立公園などで既に行っている。加賀白山でもやっている。これ以外に現在全国8カ所の国立公園で満喫プロジェクトが進行していて、阿寒、十和田八幡平、伊勢志摩、および、霧島錦江湾国立公園などでこうした協議会方式で2020年までにアウトプットを出すような取組が進行しつつある。

ワークショップ実施結果

参加者27名を2つのグループに分けあらかじめ参加者に通知していたテーマと項目でワークショップ1（以下、WS1）とワークショップ2（以下、WS2）を行った。ワークショップに先立って行われた新たな協働型管理運営体制の構築に関する説明についての質疑の中で、参加者間において説明内容が未消化である様子も窺えたため、WS1では疑問や不安を率直に付箋に書いてもらうように努めた。

またWS1とWS2の「テーマ」、「項目」、「分類」は下記の表のとおりである。WSでは「テーマ」をもとに3つの「項目」について項目ごとに3色の付箋を使った意見だしを行った。2つのグループでそれぞれ出された意見は、ワークショップの最後に時間を設けて、お互いのグループの結果を発表し認識の共有を図った。WS終了後、意見を項目ごとの「分類」に従って整理した。

表 WS1のテーマ・項目・分類

テーマ	新しい協働型管理運営体制について		
項目	心配や関心事	今後参加が必要な人や団体	運営に関するアイデア
分類	<ul style="list-style-type: none"> 人（利用者・管理者に関する内容） 資金に関する内容 整備やハード面に関する内容 趣旨・体制・運営情報発信などソフトに関する内容 その他意見（含む、説明がよくわからない） 	<ul style="list-style-type: none"> 産（ガイド・運輸会社・ホテル・企業） 学（研究者・有識者・学生） 官（国・道・市町村などの行政機関） 民（利用者・民間団体） その他 	<ul style="list-style-type: none"> 人（利用者・管理者に関する内容） 資金に関する内容 整備やハード面に関する内容 趣旨・体制・運営情報発信などソフトに関する内容 その他意見（含む、説明がよくわからない）

表 WS2のテーマ・項目・分類

テーマ	協働型管理への参画について		
項目	参画への心配事	参画のためのより良い環境とは	新しく試みたいこと
分類	<ul style="list-style-type: none"> 人（利用者・管理者に関する内容） 資金に関する内容 整備やハード面に関する内容 趣旨・体制・運営情報発信などソフトに関する内容 その他意見（含む、説明がよくわからない） 	<ul style="list-style-type: none"> 人（利用者・管理者に関する内容） 資金に関する内容 整備やハード面に関する内容 趣旨・体制・運営情報発信などソフトに関する内容 その他意見（含む、説明がよくわからない） 	<ul style="list-style-type: none"> 人（利用者・管理者に関する内容） 資金に関する内容 整備やハード面に関する内容 趣旨・体制・運営情報発信などソフトに関する内容 その他意見（含む、説明がよくわからない）

ワークショップ1：「新たな協働型管理運営体制について」の意見だし結果

<テーマ>

「新しい協働型管理運営体制について」

<具体的な意見だし項目>

- ① 「心配や関心事」 ……意見件数 70 件
- ② 「今後参加が必要な人や団体」 ……意見件数 33 件
- ③ 「運営に関してのアイデア」 ……意見件数 28 件

参加者全員から出された全ての付箋の意見を項目ごとにまとめ、意見総数 131 件を分類した結果が下表である。個別の意見とその発表者は「表大雪地域ワークショップ」の最後に示す。

表 表大雪地域の WS1：「新しい協働型管理運営体制について」

分類	心配や関心事	分類	今後参加が必要と思われる人や団体	分類	運営に関するアイデア
人（利用者・管理者）に関する内容	6	産（ガイド、運輸会社、ホテル、企業）	6	人（利用者・管理者）に関する内容	3
資金に関する内容	5	学（研究者・有識者・学生）	7	資金に関する内容	8
設備やハード面に関する内容	3	官（国・道・市町村などの行政機関）	7	設備やハード面に関する内容	1
趣旨・体制・運営・情報発信などソフトに関する内容	47	民（利用者・民間団体）	8	趣旨・体制・運営・情報発信などソフトに関する内容	12
その他の意見（含む、説明がよく分からない）	9	その他	5	その他の意見（含む、説明がよく分からない）	4
合計	70	合計	33	合計	28

参加者全27名

①新しい協働型管理運営体制への「心配事や関心事」について

全部で 70 件の意見が出された。分類すると、47 件が「趣旨・体制・運営・情報発信などソフトに関する心配事や関心事」であった。これらの意見は今回の説明だけではよく分からないという状況も含めて新しい体制への民間関係者の不安が現れているものと考えられる。さらにこの分類で「人に関する心配事・関心事」として 6 件挙がっているが、管理側の高齢化や将来的な人材育成を心配する声が多かった。

「資金に関する心配事・関心事」は 5 件で、新しい体制における資金面（予算）の裏づけに対する心配に関することであった。「施設やハードに関する心配事・関心事」は 3 件であった。

②新しい協働型管理運営体制への「今後参加が必要と思われる人や団体」について

全部で 33 件の意見が出された。これらの意見を産・学・官・民に分類したが、ほぼ同数の意見が出された。具体的には、一般登山者、地元の農家、アウトドア事業者、およびアイヌ民族などを参加させたいという意見が出た。さらに、広域の関係者で例えば旭川市関係者にも意見を聞くべきではないかとの意見も出た。一方で、試案のメンバーで十分との意見もあった。

③新しい協働型管理運営体制への「運営に関するアイデア」について

全部で 28 件の意見が出された。ここでは運営や情報発信および新たなプログラムなどに関するアイデアがいくつか出ている。その中には協力金の検討などもあり、これらのアイデアは今後の WS にて具体的な議論が行われていくものと思われる。

ワークショップ 2：「新しい協働型管理運営体制への参画」についての意見だし結果

<テーマ>

「新しい協働型管理運営体制への参加について」

<具体的な意見だし項目>

- ① 「参画への心配事」 ……意見件数 42 件
- ② 「参画のためのより良い環境とは」 ……意見件数 25 件
- ③ 「新しく試みたいこと」 ……意見件数 19 件

WS1 と同様に意見総数 86 件の意見を集計し分類を行った。その結果が下表である。個別の意見とその発表者は「表大雪地域ワークショップ」の最後に示す。

表 表大雪地域の WS2：「協働型管理への参画について」

分類	参画への心配事	分類	参画のためのより良い環境とは	分類	新しく試みたいこと
人（利用者・管理者）に関する内容	16	人（利用者・管理者）に関する内容	3	人（利用者・管理者）に関する内容	2
資金に関する内容	3	資金に関する内容	4	資金に関する内容	3
設備やハード面に関する内容	1	設備やハード面に関する内容	1	設備やハード面に関する内容	2
趣旨・体制・運営・情報発信などソフトに関する内容	11	趣旨・体制・運営・情報発信などソフトに関する内容	14	趣旨・体制・運営・情報発信などソフトに関する内容	11
その他の意見（含む、説明がよく分からない）	11	その他の意見（含む、説明がよく分からない）	3	その他の意見（含む、説明がよく分からない）	1
合計	42	合計	25	合計	19

参加者全27名

①新しい協働型管理運営体制への参画に関する「心配事」について

参画することについての「心配事」には合計 42 件の意見が出された。分類した結果で 16 件と最も意見の多かった「人に関する心配事」は高齢化や人材育成に関することであった。次に「趣旨・体制・運営・情報発信などソフトに関する心配事」の分類で 11 件の意見が出た。具体的には、意見の集約が参加者間でできるのか、現場作業以外に会議の運営日程などで参加が可能なかなどの意見であった。

また、新しい体制が具体的でないので参加が不安といった意見もあった。その他の意見 11 件には、WS1 でも示されたように、説明の内容がよく分からないので参加が不安であるというものも含まれていた。

②新しい協働型管理運営体制への参画に関する「参画のためのより良い環境とは」について

この項目に対して出された全 25 件の意見のうち、最も多かった意見は、運営体制や情報発信についての意見であり 14 件であった。多くの人が事務局体制とその運営方法をしっかりと実施していくことを望んでいた。さらには、情報の発信と共有や管理団体の一元化なども望まれていた。

③新しい協働型管理運営体制への参画に関して「新しく試みたいこと」について

19 件の意見は多岐にわたっているが、民間資金の調達、SNS を使った情報の共有と発信、活発に発言を行うメンバーでの議論がしたいなどの意見が出された。

ワークショップのまとめ（学識経験者のコメント）

表大雪地域の WS を終えて、参加いただいた愛甲先生と木村先生にワークショップのまとめとしてコメントを求めた。コメントは以下のとおりである。

- | | |
|------|--|
| 木村先生 | <p>登山道整備は待たなしの状況下で山守隊が立ちあがって活動をしている一方で、環境省は新たな協働型管理運営体制について関係者の意見を入れつつじっくり議論して立ち上げをしていくという両輪で動いていると認識している。</p> <p>本日の WS の意見から個人や民間団体の思いだけではコントロールできない状況であることは皆様も承知されていると認識したので、「同じ土俵で議論できる場」の必要性を感じた。私のグループでは荒廃した登山道、し尿、外国人対応、情報発信など様々な課題に関して、会員の高齢化、予算の問題、実行部隊など現状の限界を訴える意見が多く出され、推進組織のあり方の議論が必要であると感じた。</p> <p>一方で、外国人対応も急ぐ問題として認識されていた。観光の分野から推進組織として DMO (Destination Management Organization) 概念の導入などは今後大雪山でも必要だと強く感じた。</p> <p>自分は環境省の東北地方環境事務所での仕事で、3 県 28 市町村またがるジオパーク全長 900km に及ぶ「みちのく潮風トレイル」のシステムづくりをしているが、現在まさに推進組織を作ってどうしていくかという段階である。大雪山でも登山道の規模的には同じようなものであり、この経験から急ぐ事柄とじっくりと議論する事柄の両輪で動いていく必要があると感じており、来年度以降も期待したい。</p> |
| 愛甲先生 | <p>今回の WS に当たって平成 22 年に行われた登山道情報交換会発足時の WS を思い出した。この時の WS で明らかになったのは、「初期の管理水準がほとんど周知されていなかったこと」および「横の連絡が取れていなかったこと」の 2 点であった。こうした反省から登山道情報交換会ができたわけだが、本日の説明の総合型協議会はまさに大雪山には今後必要なものであると考えている。というのも、世界自然遺産に登録されている、自然再生事業を実施している、国立公園満喫プロジェクトを実施している国立公園では、これらの取組を実施していくために民間も含めて関係者が話合う機会が年 2~3 回程度はあり、今後の国立公園の管理運営のあり方も話し合われる。そうしたことを今後、大雪山でも実施する必要があると思われる。</p> |

協働型管理運営体制の検討については、環境省において平成 27 年度から検討調査業務が実施されており、我々有識者もその手伝いをしてきたが、本日の参加者にもこれまでの検討内容を紹介した方がよかったと思った。また、本日出た意見をまとめて、参加していない方々や東大雪地域の方々に速やかにフィードバックしていただくとともに、今後も WS の機会にさらに意見を出し合うことで取組を推進してほしい。

表大雪地域のWS1：「新しい協働型管理運営体制について」の意見と発言者

発言者	心配や関心事	今後参加が必要と思われる人や団体	発言者
伊吹	協議型協議会がメンバーとしての活動は当面可能だが組織の高齢化での先の活動は？	アウトドア関連企業	木村
伊吹	現在での体制はどうか？	旅行社	木村
伊吹	来年度の体制は一部の民間団体が参加するだけで、本当は大きな体制が変わる。民間資金を想定する上で、プレイヤー(仕事)の確保が必要	情報サービス提供者(スマホ、プロカメラ等)	木村
伊吹	民間資金を想定する上で、プレイヤー(仕事)の確保が必要	民間企業 観光	片山
伊吹	登山道整備を担う人材	広報、マーケティング関係	伊吹
伊吹	民間、特に市民団体の特殊性	登山を推進している企業(アウトドアウェア、観光、旅行)	伊吹
伊吹	尾瀬中道27年36万人、大雪山平成27年3.6万人 利用者数の違いを生かす保全ルール整理	哲学者	佐久間
伊吹	予算 一市町村からの負担金 予算の確保が難しく十分な活動ができるのか心配	登山道部会 会計スタッフ	佐久間
伊吹	予算 (特に交通費・装備)	登山道部会への入園料が必要か？	伊吹
伊吹	ezorockのとき一礼房から尾瀬までをドライブを連れてきて自然保護をしていますが、礼房から尾瀬(将来的には他山)までの交通費が不安、どこから…	国立公園への入園料が必要か？	伊吹
伊吹	具体的な行動にあたっての予算の分担、修後のメンテナンス(登山道の場合)を継続して続けなければ整備予算が確保される	入園料・入園料を神訳して運営費(財源)を確保する	伊吹
伊吹	登山道の荒廃(修繕してすぐ荒れる)	利用者負担を本気で考えるべき	伊吹
伊吹	災害による林道閉鎖により登山道コースの高度化が心配、早急な復旧役をどう大雪山は対応できるかという本質的な課題があるのか？	冬季(積雪期)に見る道標、目印	伊吹
伊吹	協議型協議会の中に今後策定されるべきことがあがる、これによって関わり方が変わってくるのか？	利用者の意識を高めようとしてフックアップ窓口を決め、人・モノ・カネを継続的にサポート！	伊吹
伊吹	多様な主体が参加し、いろいろな意見が出ると思いますが、うまく合意形成ができるのか？	ごからの2回の場合はある程度テーマを決めて実施してはどうか	伊吹
伊吹	北海道を代表する山岳関係の目的、フックアップ窓口は必要、運営主体(事務局)は環境適した担当者や移動にもない、合意事項、保護事項の引継ぎは確保されるか、特にPDCAのACに陥るころ	国立公園管理委員会のメンバーが、連絡の体制に対するスタンスの提示	伊吹
伊吹	現状協議で、課題とすべき評価方法をどうするか	登山道維持管理委員会のメンバーが、連絡協議会の話し合いに、必要な時は参加できるといい(登山道以外の話の時は)	伊吹
伊吹	外国人対応、言葉の問題、国や人種によってマナーやルールが大幅に違う	どこかの段階で課題ごとのグループ検討を	伊吹
伊吹	利用している人と管理している人に区切りを感じた。	幅広い課題と収集できる者が少ない。	伊吹
伊吹	実際に利用している人のほとんどは情報に関心がない	即会設定を。	伊吹
伊吹	管中心のこれまでの管理運営に対して、広く様々な立場の人、団体から協議できるようにしてきてきたことに対して強い関心を持っている。	大雪山の利用とあり方の会議	伊吹
伊吹	検討事項が大きくなる具体的なので、このままの議論では話が散漫になる	WSの様子など新聞、SNSで発信し参加者の拡大を	伊吹
伊吹	共通の認識が必要(ある程度)なので、国立公園内に入る際、現状の提示が必要	年に何度もメンバー一同に集まるのは大変、メールやネットを有効に活用できないか	伊吹
伊吹	将来の人口減、国立公園の利用者数が減少との予想がある中でその将来時間軸をどうあるか提示が必要	取り組まないこと、やぶいことを提案してもらい、それをメンバーで議論→承認→実行→評価→報告	伊吹
伊吹	一週間の議論にならなければいけません	広報面、フォーラム等の実施	伊吹
伊吹	美濃市上トーン管理運営協議会が総会型協議会にどうかかわればいいのか？	ジオフォーメーションの提案	伊吹
伊吹	登山道維持管理委員会の位置づけは？	他地域の事例を勉強	伊吹
伊吹	総会型協議会はどうかかわるのか？	具体的な提案があればそれが整備、啓蒙活動	伊吹
伊吹		管理運営に関わる組合の意識、例えば、ロープウェイ乗降券プレゼントなど	伊吹

発言者欄「」：付箋に名前の記載がなかった人

表大雪地域のWS2：「協働型管理への参画について」の意見と発言者

発言者	参画への心記事
内藤	組織の成熟化
澤崎	高齢化が進んでいる団体で参画して協力できることがあるのか
佐藤	国立公團利用者の減、1少子、高齢者増
佐藤	各山岳団体の弱体化
下条	買なせしめし、時期のタイミングなどの参加のしかた
佐藤	参画団体の高齢化の問題で継続参加が難しい
佐藤	人材育成
佐藤	新人教育の前に参画に新人の参加が少なくなっている
伊須	果たして保険費が移動する前に解決できるのか
伊須	中核担当として参画した団体としての自覚があるか、実際の現場の活動については不安がある
伊須	今のメンバーの年齢構成で運営経理や事業に参画できるか不安
藤木	若い人の人材育成（今の参加者、高齢化してきます!!）
高橋	継続性（各団体の）研究習子ワークショップ
高橋	ボランティアを送る、広報する上での連携させるか、スタッフを必ずつけるかなど、リスク、責任
高橋	型枠の成熟化にあたって要材入山団体その責任がある程度あればボランティア・インターン等、送り出しやすいが難しいことと認識している（業改等のリスク）
伊吹	ボランティアを連れていけるかと、事故等のリスクが不安
大塚	問題解決の計画に参画しても予算上の都合で先延ばしにされる心配がある
高橋	民間のノウハウが一つ一有機？無機？
佐藤	民間での活動予算を自分たちで取に行き、取ればから活動できない
伊吹	大雪山グループの表示が足りていない、取ればから活動できない、表示も大きく!!
高橋	平日の日中では参加者が集まらない
伊吹	この議論を生かす方法、記録をどうアップデートするか
伊吹	内容について情報発信をいかに、
伊吹	協働型参画事業の集大成
伊吹	推進する日時、場所、移動手段
伊吹	気象に参画できる環境作りが必要ではないか
高橋	決まった役割を担い切れるかわからない、その中でどういったことができるかまた買えない、どのように求められているのか（求められているか、いないか含め）わからない
伊吹	全体の目標が不明確
伊吹	参画にくい
伊吹	自分だけが行動、夏期1回に協力できる余裕は小さい、何をどうにか進めるのか心配
伊吹	各立場を代表する団体に意見集約できるのか？
伊吹	入込数による管理の困難
伊吹	途中でバコを外されること
伊吹	外国人の大幅増加に伴う対応がほとんどできていない、特に山岳環境
伊吹	山岳環境の変化、特にPS、スマホ、その他IT機器の環境にあるエリアは少なくない、その弊害は多い
伊吹	時間
伊吹	時間の割増に+1課
伊吹	余裕（体力・時間一應済）
伊吹	菊池
伊吹	参画
伊吹	協働型管理とは？共通する単純な事業が必要か？
伊吹	ユーザーには普及しにくい、どこまで自指すのか
伊吹	山の人間は室内では元気ない、現場へ行きたい

発言者	参画のためのより良い環境とは
伊吹	若者の声だけでなく若者自身が参画できる環境
伊吹	幅広い年齢層
伊吹	推進できる中心人物または団体がいること（合意を求め過ぎても進まなくなってしまう）
伊吹	事業参加型入山団体への支援や原材料の提供先は？
伊吹	手弁当で活動している人が多く中で一部の実用を出してあげられれば良いのでは？
伊吹	協働云々以外で働いている人は嫌です
伊吹	そこに予算がついていないこと
伊吹	ピンポイントでの参加を促す活動への参加を促す
伊吹	長く堅持できるような事務局体制、構築
伊吹	業務でも強固でもなく自発的に参加できる雰囲気づくり
伊吹	PDCAのサイクルが明確に示されることが重要です
伊吹	話し合いの過程がつかつかと現地で反映されること
伊吹	法に縛られすぎない参画しやすくなるのではないか
伊吹	参画して何が議論できるのか、やらせのイメージを壊さず（中心の課題が見えるようにすること）
伊吹	議論の提案づくりが必要
伊吹	登山道、トイレ、利用、情報発信だけでなく、いろいろな課題に対応できる場にする
伊吹	遠くからでも参加できる情報共有できる仕組み
伊吹	常にどこどこに参画する情報を確保する、入ってくる
伊吹	様々な機会、情報の共有、核（事務局）、場所（拠点）
伊吹	参加型同士のコミュニケーションがよい方向に取れることにより管理・運営がスムーズにいくと思います
伊吹	登山道管理については管理団体の一元化がよい
伊吹	10回のWSを6回も1回の行動、1回の飲み会？
伊吹	一度、この前さんと登山道を歩きたい
伊吹	行政の若手をまずは山へ連れていきたい

発言者	新しく試みたいこと
伊吹	山のイベントと若者をつなげる、交流させるツアー
伊吹	コーズ・ネットできる人、団体による長期休暇中の学生向け整備プログラム、翌年へと続けていく
伊吹	民間からの資金集め
伊吹	民間資金を活用した（企業等の寄付）大雪山基金の創設
伊吹	民間資金（企業？八幡平？）
伊吹	現在使用できない登山道を復元整備できないか
伊吹	大雪山グループのネットワーク（SNS）を活用する
伊吹	海外からの入山客に対して統一されたマニュアルをつくり、説明する場、要員を確保する
伊吹	一般登山客からの客が居る場があるように
伊吹	ヒグザン生態観察結果の資料の活用を図り、解析、分析、発表まで仕上げる、ヒグザン情報センター
伊吹	それぞれの活動と活動の発表を、参画する分野の明確化
伊吹	今の大雪の状況をステータス的に知らしめるTVなどを利用して、そして理解を求める
伊吹	有志の整備をサポートする体制（道具、予算、専門家、指導者の派遣）
伊吹	深い議論・決定ができる「運営メンバー」と共有者が情報交換を行い「協議会メンバー」を付けてスピードを出す
伊吹	今回の意思を生かせるもの、生かれない部分の色分けを
伊吹	WS3以降のついでに時点を整理記録を！
伊吹	大雪山グループから立ち直し 当初は研究会ネット企業大塚協賛主催一布九町もち結び せねばりに関係あるつもりが終了後に交流もあった

東大雪地域ワークショップの記録

日時:平成 30 年 3 月 15 日(木) 13:30~16:30

場所:とかちプラザ 403 会議室 (帯広市)

平成29年度 大雪山国立公園における協働型管理運営体制の
構築に向けて民間団体の皆様の関わりと対応を考えるワークショップ
参加者一覧

	所属	氏名
1	合同会社北海道山岳整備	岡崎 哲三
		下條 典子
2	新得山岳会	小西 則幸
3	ひがし大雪自然ガイドセンター	河田 充
4	ポレアルフォレスト	阿久澤 小夜里
5	十勝山岳連盟	齊藤 邦明
6	(株) りんゆう観光	佐藤 竜也
		白石 真介
7	北海道大学大学院 地球環境科学研究院	教授 渡辺 悌二
8	北海道大学大学院 農学研究院	准教授 愛甲 哲也

◇ 東大雪地域ワークショップ

WSの結果として、質疑応答の内容、WSでの意見だしの結果、WSのまとめ（学識経験者のコメント）を以下に示す。

質疑応答

- 河田氏 上士幌側は国有林であり、登山道の整備で何をするにしても土地所有制度による制約があり、国立公園制度と二重行政となっていて困っている。
- 榊自然保護官 そこは難しい問題で、法律や制度の部分は変えられないので、運用面をいかに工夫してうまく現場でやっていくのかということになる。今日ご説明した新たな体制をつくることにより、運用をどうするかも話し合うことができるのではないかと思います。
- 小西氏 今回説明された協働型管理運営体制というのは、環境省がパークボランティアを動員して管理作業することには限界があるので、他の民間団体もパークボランティアと同様に管理作業の実働に加わってほしいという願いとして当初捉えたが、違うのか？そのような実働でなく方針や計画を皆で協議する場をつくると考えて良いのか？ ザックを背負って何かしてくれということではないということが良いのか。
- 榊自然保護官 今回の話は、国立公園の将来像を皆でどう作るのかの議論の場をつくりたいと考えており、そこに皆さんがどのように関わられるのかかという話。現行の大連協のメンバーは限られているので、ここに皆さんにも関わっていただきたいと考えている。
- 斎藤氏 北海道の登山者は20万人いると言われているが、そのうちで団体として活動できる者は1%位のものだ。団体の高齢化により、各団体で活動できる人は団体の1割程度で、少なくなる一方であると思われる。また、団体に所属していない一般登山者の意見をどう取り入れていくのかも心配している。
- 榊自然保護官 未組織の登山者の意見をどう吸い上げるかは悩ましいところ。まずは、地元の関係者がどうしていくのかをしっかりと議論して出す。そして、フェイスブックをはじめSNSから意見を把握したり、パブリックコメントなどを通じて意見を聞くことなど様々な方法が考えられる。いずれにしても未組織登山者の件は課題と言うかキーになってくると思う。
- 岡崎氏 「話し合いの場を作りたい」、「人を集めたい」という話をされているが、その結果としてどういう結論を出したいというのか、榊氏の考えを聞きたい。
- 榊自然保護官 登山道に関わっている関係者の皆様には、スライドで紹介したパブリックコメントやオブザーバーによる関わり方よりは、もっと積極的な関わりをしてほしいと希望している。ただ、具体的にどう関わるかについては、皆さんに押し付けるものではないため、私からは控えたい。
- 岡崎氏 このメンバーで重要なのは、登山道の浸食をどう食い止めるかの結論であって、話し合っただけでどうこうではないし、話しても浸食を止めるという一点に結論がまとまっていけないのではと不安である。行政は管理責任の一端があるので榊氏が、今後大雪山をどうしたいのかが知りたいと思った。「地元の人で話し合っただけ」ではなく「地元の一つが環境省」だと思う。本日は表大雪に比べて人数も少ないので思いきって聞いてみたい。

延長 300km の登山道全体が荒廃しているので、管理がすべて行き届いた状態を作ることが理想。環境省だけでは現実問題として限界があり、現状で管理が及ばない部分、不足している部分について、今後どうしていくかを皆で知恵を出していき解決していくしかないと考えている。地元を突き放しているのではなく、地元の一員とも考えていることは御理解いただきたい。

ワークショップ実施結果

東大雪地域で行った WS と同じ実施手順により参加者 10 名全員を 1 グループとして WS を実施した。

ワークショップ1：「新たな協働型管理運営体制」についての意見だし結果

<テーマ>

「新しい協働型管理運営体制について」

<具体的な意見だし項目>

- ① 「心配や関心事」 …… 意見件数 27 件
- ② 「今後参加が必要な人や団体」 …… 意見件数 13 件
- ③ 「運営に関するアイディア」 …… 意見件数 10 件

参加者全員から出された付箋の意見を項目ごとにまとめ、意見総数 50 件を分類した結果が下表である。個別の意見とその発表者は「東大雪地域ワークショップ」の最後に示す。

表 東大雪地域の WS1：「新しい協働型管理運営体制について」

分類	心配や関心事	分類	今後参加が必要と思われる人や団体	分類	運営に関するアイデア
人（利用者・管理者）に関する内容	3	産（ガイド、運輸会社、ホテル、企業）	3	人（利用者・管理者）に関する内容	0
資金に関する内容	0	学（研究者・有識者・学生）	2	資金に関する内容	0
設備やハード面に関する内容	7	官（国・道・市町村などの行政機関）	1	設備やハード面に関する内容	0
趣旨・体制・運営・情報発信などソフトに関する内容	7	民（利用者・民間団体）	3	趣旨・体制・運営・情報発信などソフトに関する内容	3
その他の意見（含む、説明がよく分からない）	10	その他	4	その他の意見（含む、説明がよく分からない）	7
合計	27	合計	13	合計	10

参加者全10名

①新しい協働型管理運営体制への「心配事や関心事」について

全部で 27 件の意見が出された。そのうち最も多かった 10 件がその他の意見に分類されていて、具体的には管轄する行政体制への疑問や新しい協働型管理運営体制の具体的なイメージが出来ないといったことであった。人に関係する心配事は表大雪と同様に高齢化や人材育成に関するも

のであった。施設への心配も7件あった。この中には、アクセス道路の不通箇所が多いことやトイレブースの促進に関する意見が含まれていた。また、体制や運営などについては、現場での具体的な問題にどのように結びついていくのかといった疑問や不安の声が7件あった。

②新しい協働型管理運営体制への「今後参加が必要と思われる人や団体」について

全部で13件の意見が出された。具体的には、一般登山者、動物専門家、および地元の教員などであった。さらに、表大雪同様に広域の関係者で例えば帯広市の関係者にも意見を聞くべきではないかとの意見も出た。表大雪との人材交流も意見としてあった。

③新しい協働型管理運営体制への「運営に関するアイデア」について

全部で10件の意見が出された。総合型協議会と民間団体の位置づけを明らかにすることや、議論の内容を具体的に望む意見が出された。フォーラム開催や表大雪との合同情報交換会などの提案も出された。

ワークショップ2：「新しい協働型管理運営体制への参画」についての意見だし結果

<テーマ>

「新しい協働型管理運営体制への参画について」

<具体的な意見だし項目>

- ① 「参画への心配事」 ……意見件数9件
- ② 「参画のためのより良い環境とは」 ……意見件数8件
- ③ 「新しく試みたいこと」 ……意見件数8件

WS1と同様に全ての付箋の意見を集計し意見総数25件を分類した結果が下表である。個別の意見とその発表者は「東大雪地域ワークショップ」の最後に示す。

表 東大雪地域のWS2：「協働型管理への参画について」

分類	参画への心配事	分類	参画のためのより良い環境とは	分類	新しく試みたいこと
人（利用者・管理者）に関する内容	5	人（利用者・管理者）に関する内容	0	人（利用者・管理者）に関する内容	0
資金に関する内容	0	資金に関する内容	0	資金に関する内容	1
設備やハード面に関する内容	0	設備やハード面に関する内容	0	設備やハード面に関する内容	0
趣旨・体制・運営・情報発信などソフトに関する内容	1	趣旨・体制・運営・情報発信などソフトに関する内容	5	趣旨・体制・運営・情報発信などソフトに関する内容	2
その他の意見（含む、説明がよく分からない）	3	その他の意見（含む、説明がよく分からない）	3	その他の意見（含む、説明がよく分からない）	5
合計	9	合計	8	合計	8

参加者全10名

①新しい協働型管理運営体制への参画に関する「心配事」について

参画についての「心配事」には9件の意見が出された。その内、5件が管理する側のマンパワーの減少についての心配であった。具体的には表大雪地域と同様に高齢化と若者の人材育成がその主たるものであった。

その他には、マンネリ化や年々の負担増加を懸念する意見も出た。

②新しい協働型管理運営体制への参画に関する「参画のためのより良い環境とは」について

全8件の内、運営などへの意見が5件と多かった。具体的には参加する意義や立場を明確にしてほしいことや、許認可の簡素化などが望まれており、より実践の現場に即応したものが多かったようである。逆に大雪山全体での協議課題などに関しては参加者間で理解があまり得られなかった様子であった。

③新しい協働型管理運営体制への参画に関して「新しく試みたいこと」について

8件の意見が出された。民間資金の調達、情報の一元化、外国人対応などの将来的な試みに対する意見が出た。

ワークショップのまとめ（学識経験者のコメント）

東大雪地域のWSを終えて、参加いただいた愛甲先生と渡辺先生にワークショップのまとめとしてコメントを求めた。コメントは以下のとおりである。

愛甲先生	<p>最初のワークショップでは心配事が多く出て、ほとんどが「いいね」の手が挙がっていたので、この意見をまとめて皆さんにフィードバックしていただきたい。</p> <p>一方、協働型管理運営体制や総合型協議会について皆さんは必ずしもイメージができて理解していないように感じられた。表大雪地域のワークショップには木村先生に来ていただき、「みちのく潮風トレイル」や「信越トレイル」の例が挙げられたが、そのような具体的な話をしてもらう必要があると感じた。</p> <p>東大雪と表大雪では面積、山の奥深さ、およびアクセス道路などにおいても状況が違うので、付箋の意見を表大雪と東大雪で相互にフィードバックと共有をしてほしい。今後のWSでは森林管理署の方や役場関係者がいた方が良いと思った。</p>
渡辺先生	<p>協働型管理運営体制の進め方やその場で議論のする内容について説明があったが、大連協を拡大させて総合型協議会にすることをトップダウンでやる感じがした。同じ土俵でやっていく、同じレベルでの入り方をしていくという雰囲気を出さないと関係者は積極的になれないし、高齢化の問題、お金の問題、および許認可の問題など様々なハードルを乗り越えられないのではないか。そのような姿勢を環境省が明確に伝えてくれないと次の段階に行けないのではないか。</p> <p>2回目以降のWSについては、総合型協議会と登山道維持管理部会を明確に分けて議論しないと、議論がどこに行くのか心配である。</p>

東大雪地域の WS1：「新しい協働型管理運営体制について」の意見と発言者

発言者	心配や関心事	発言者
河田	現場で働く人材の育成確保、危険な作業のため	豊甲
豊甲	若者はいるのか？	河田
佐藤	登山者の安全確保	豊甲
河田	2016台風に伴って登山道が不通→登れない山が多い	河田
豊甲	登山道の整備が登山者のニーズに合うのか？	河田
豊甲	林道、登山口の状況	河田
小西	登山道に至る林道不通の長期化	河田
河田	登山道に於ける林道不通の長期化	河田
河田	二ヶツボカコースの利用増加による登山道の水枯化	河田
-	積雪トレイルレースの促進運動	河田
河田	話し合いの場があってもまとまるのか？とくに行政	河田
小西	ピジョンや方針と云われても、関心事は、登山道整備・トイレ・避難小屋になる	小西
白石	保全の役割確保 意見の対立があるのでは？	小西
豊甲	一般登山者も考慮した関係者、団体 ひろえているか。	河田
河田	もしお金が集まり、雇って山をたもつとき、行政は賞与できるのか	河田
河田	関係者の立ち位置がわからないで、言っているのか	河田
河田	登山道の問題と野営指定地の問題をセットにして考える必要がある	河田
河田	整備主体の明確化は？ 関係者・林野庁	河田
河田	登れない山が多い為、地元への客が減少	河田
河田	地元への山の興味の高さ	河田
小西	パークボランティアの拡大のために管理の委託制にはならぬです	河田
小西	東大雪地域には思い入れが強いが、大雪山全体には弱い	河田
河田	経験が手重すぎたが、保安林の問題が解決できない	河田
河田	国立公園として一帯のとりかめがよい部分と？の部分が出てきそう	河田
河田	二ヶツボ山前・天狗トレイルレースの更新、これも関係者も及び関係者	河田
河田	関係者の意向	河田
河田	利用者全体の制約なので、その雰囲気、流れも作っていく必要がある...	河田

今後参加が必要と認められる人や団体	発言者
山岳ガイド（他地域や全道、全国レベル）	豊甲
十勝の広域観光の関係者	豊甲
スポンサー	河田
野生動物研究者	豊甲
学校（地元）の先生	河田
穂上市や周辺自治体	豊甲
未組織、一般登山者の参加できればアンケート等の意見も欲しい	河田
観光協会	豊甲
自然保護団体を雇ったか、関心が薄いように感じる、雇いたいからでも必要かも	河田
個人一般登山者またはそれを取り扱われる人	河田
東大雪には東大雪の人	河田
森には東の人	河田
森の自然保護者	河田

運営に関するアイデア	発言者
まず全体の「東大雪山」の中核民間団体の関係を明確にすること（議論を始める前に）	河田
大連協の人と民間の人が一緒に議論する場が必要	河田
「総合型協議会」と「登山道維持管理委員会」の内容が明確でないままに議論を始めてはならないか	河田
意見出しただけならメールでよい、メールは出さないと	河田
多岐意見がよい意見とはかぎらない	河田
チームワーク、対立構造の解消での講習	河田
皆で山に登りたい	河田
整備等、協力一般登山者（ボランティア）の登録等、点検などめたえる	河田
登山道や監視カメラの設置をテーマにした大雪山フォーラム	河田
東大雪に合同の情報交換会	河田
	河田
	河田

発言者欄「」：付箋に名前の記載がなかった人

東大雪地域の WS2：「協働型管理への参画について」の意見と発言者

参画への心配事	発言者
自身の行動力の低下	河田
後継者の育成	河田
自分の組織が世代交代した時の温度差が心配	小西
参画する後継者を育てられるか	河田
若者、学生をどうやって取り戻せるか	河田
100万円集めた？地回って配る？大連前は役に立つのか？	河田
マンパル化（5年後？、10年、20年後）	河田
負担の増加（奨励金/ボランティア）	河田
どこに拠点を置いて考えていけばいいのか...	河田

参画のためのより良い環境とは	発言者
地元観光関係者の理解と協力	河田
自由に山の遊び方を考えられる場	河田
参画する立場	河田
参画する意義	河田
立場をくすして目的を共有し、一緒に新しいものをづくりあげたい気持ち	河田
許認可の一元化	河田
整備のスピードアップ	河田
許認可の簡素化	河田

新しく試みたいこと	発言者
民間の助成金を利用して整備	河田
マスコットのデザイン	河田
大雪山の情報を一元化	河田
外国人に情報を与えるシステム作り	河田
外国人の意見を集めて協議会にフィードバックする	河田
「登山道ツアー」の実施	河田
登山道整備カメラの設置	河田
動物園が保育できる環境づくり	河田

発言者欄「」：付箋に名前の記載がなかった人

大雪山国立公園における協働型管理運営体制の構築に向けたワークショップ(第2回) 開催結果

環境省上川・東川・上士幌自然保護官事務所



ワークショップの様子

今回のワークショップでは各地域の情報交換会後にお時間を頂き、情報交換会を登山道維持管理部会に移行するという提案に対して2つのテーマ「①部会では何を実施したいか？すべきか？」、「②部会に必要なもの、こと、機能は何か？」を設定し参加者からの沢山のご意見を頂きました。行政機関、民間団体、有識者の皆様、ご参加ありがとうございます。ワークショップ質疑応答・学識者コメントは右側、意見のまとめは裏面をご覧ください。

ワークショップ開催日時・場所、参加者

	開催日時・場所	参加者数
表大雪地域	平成30年 7月2日(月) 14:30~16:00 旭川地場産業 振興センター (旭川市)	48名 ・行政機関、民間団体46名 ・学識経験者2名 (48名を2グループに分け実施)
東大雪地域	平成30年 6月29日(金) 15:00~16:30 鹿追町役場 (鹿追町)	20名 ・行政機関、民間団体20名 (20名1グループで実施)

【配布資料】

- ワークショップ次第
- 参加者名簿(地域別の名簿)
- 資料1 大雪山国立公園における協働型管理運営体制の構築に向けたワークショップの開催趣旨
- 資料2 第1回ワークショップの結果概要
- 資料3 第1回ワークショップの結果を踏まえた民間団体の協働型管理運営体制への関わり方に関する提案
- 資料4 ワークショップの進め方
- 参考資料1 第1回ワークショップの結果(詳細版)

当日のプログラム(表大雪地域、東大雪地域共通)

1. 開会
2. ワークショップ開催の趣旨、第1回ワークショップの結果及び同結果を踏まえた民間団体の協働型管理運営体制への関わり方に関する提案(30分)
3. ワークショップ「登山道維持管理部会で実施したいこと」(50分)
4. まとめ(10分)
ワークショップ全体のまとめとして有識者からのコメント

ワークショップでの質疑応答と学識経験者のコメント

表大雪地域での質疑応答

三木氏	資料1~3の説明は登山道に特化されていたようだが、トイレ部会、道標部会など個別に作っていくのか。
柗自然保護官	登山道維持管理部会は登山道そのものだけでなく付帯施設と一緒に議論していくほうが効率的だと思う。施設の老朽化対策だけでなくトイレ問題も含めて登山道維持管理部会の中で考えていければよい。
渡辺先生	第1回のワークショップの結果を受けてと書いてあるが、結果の内容が大事だったから今回のワークショップになったのか、それとは別に結果を無視して今回のワークショップの意見を書き始めていいのかが良く分からない。
柗自然保護官	前回の結果から、情報交換会のメンバーにおいては登山道関係に特化して議論した方が良く考えて、今回の設問にした。
北岡氏	前回のワークショップでは総合型協議会といった全体的な話に対して、参加者はイメージが湧かず意見も出なかった。今回は登山道に絞って意見をいただく方が良くはないかということでは。
愛甲先生	ここにいる皆さんが全員第1回のワークショップに出ていたわけではないし、参加した人がその内容を覚えているわけでもない。資料2の最後のページのまとめに書いてあることを今の説明としてもう一度見てほしいと思う。また、今回は登山道維持管理部会になると決まったわけではなく、そうした提案に対しても意見をいただくということで考えていただければ誤解が無いように思う。

表大雪地域での学識経験者のコメント

愛甲先生	本日の資料の中に前回のワークショップの報告書資料も入っていたのは良かった。皆さん気にされていると思うが、今回話し合った結果がこの後どうなるのか、各自治体と柗さんが今進められている総合型協議会設立に向けた調整の中で我々登山道情報交換会の関係者の意見がどう扱われていくのか。そのため今回のワークショップの結果も出来るだけ早く皆さんと共有した方が良くはないかと思う。もう一つは、いずれ考えて行かないといけないと思うが、登山道維持管理部会を作ると責任も生じる。登山道維持管理部会自体が事業主体になるわけではないとの話もあったが、利用している人から見ればそこで何かを決めていることにも見えるため、責任の分担やリスク管理をどうするかということもきちんと話していかなければならないと感じた。
渡辺先生	まとめのコメントと言うより、皆さんに問いかけをしたい。第1回目ワークショップの結果の資料がここにあるが、どれだけの人がこの内容をそしゃく・消化して来ているのか？ほとんどされてないのではないかと感じる。その状況で今回2回目をした。この結果をどれだけの人が消化できるのか、消化には時間が必要なのではないかと思うのだが皆さんどう思うか。振り返りがあって次に行く方が良くはないかと感じた。具体的には、本日柗さんが言われたように両地域で新しい総合型協議会についてイメージできていないということがある。これは非常に大きな問題だ。今の大連協の皆さんが新しい総合型協議会について本当に合意形成出来ているのだろうか、その声を私たちが生で聞かなくていいのだろうか、私たちは登山道維持管理部会としてやっていけるのだろうかという心配がある。そこら辺を皆さん自身にも問いただして頂きたいと思う。後は、愛甲先生も発言していた登山道維持管理部会のことだが、今の情報交換会は自発的にやって、よいバランスで上手くやってこられたが、登山道維持管理部会が一旦できてしまうと上に新しい大連協が出来て、上から言われたことをそのまま実行するという覚悟があるのか。また、登山道維持管理部会には一定の独立性というものが必要と思うが、その時には愛甲先生がおっしゃったような責任というものが関わってくるのでそれについても皆さん覚悟がおりになるのか、そうなることがハッピーなのかを考えてほしい。今は総合型協議会や登山道維持管理部会は案の段階であるが、黙ってればこの案がそのまま決定になってしまうということを周りの人ときちんと話し合い、これで大丈夫だという所まで話し合えない時期に来ているのではないかと感じる。こんな風に言うといつも暗いことを言っているように思われるが、岡崎さんが言っていたように楽しくやっていくことは大好きで、うまく観光と結び付けられると新しい人が関わることになるので、その仕組みを何とか皆さんと一緒に楽しくやっていけると素晴らしいと思う。

東大雪地域での質疑応答

大西氏	今回のワークショップは登山道維持管理部会を設置する前提でのワークショップと考えていいか。情報交換会を登山道維持管理部会としたい理由は何か？
柗自然保護官	情報交換会は登山道の情報を持ちあって交換することで、それはそれで意義があることだが、登山道に関しては課題や解決しなければならない問題があり、それらを議論して調整していくことが必要だと思う。情報交換の機能に加えて調整や合意形成の機能を付け加えたいということで提案させてもらった。
斎藤氏	ワークショップの上では理想的な考え方で喋っていると思うのだが、現実的に解決出来ない課題もありそのギャップの部分はどこをどう考えているのか。トイレ1つを取ってみても、トイレを山の上に作ったらいいと思うが、維持管理をどうするのかといった現実的な問題が出てくる。それを現実的にどうするかを議論することになると思うが...
柗自然保護官	イメージしていることが同じかどうか分からないが、おっしゃる通りのこともあると思う。何が出来るかをメンバーの知恵を出し合って議論する場にしていきたいと思っている。
岡崎氏	話し合いの場を増やすのか。
柗自然保護官	話し合いの回数は増えないが、話し合いの項目が増えると考えている。
岡崎氏	自分としては新しい大連協の方々に話を聞いてもらえれば有難いと思っている。いつも思うことは裾合平やトムラウシでのことは関係者にとっては別の地区のことと思いがたがるが、一般の人にとっては大雪山で起ったこととして一括りになっている。新しい大連協のメンバーに対しては、登山道が崩れて怪我人も出ており、道は崩れて放置されているのに何もせず、外国人登山者には恥ずかしくてしょうがないと思っているので、直接新しい大連協のメンバーに言いたいと思っている。一方、歩道のことを考えていくのならそれはそれで具体的にいいのだが、大雪山をどうするのか？という所から考えていかなければならないと思う。話し合い相手は選ばなければならない。
柗自然保護官	将来像を考えると現場の人が関わらないといけないと思う。新しい大連協のメンバーが現場を巡検することなどが必要だし、そうした時に維持管理部会の協力を得て行うなどの工夫は出来るかなと思っている。今、きいた話は新しい大連協と登山道維持管理部会との相互交流が必要ということだと受け止め今後考えていきたい。

※東大雪地域には学識経験者の出席は無し

ワークショップ意見のまとめ

情報交換会から登山道維持管理部会に移行するという提案を受けて…
 「①部会では何を実施したいか？すべきか？」→黄色付箋で回答
 「②部会に必要なもの、こと、機能は何か？」→緑色付箋で回答

表大雪地域付箋	56枚	42枚	東大雪地域付箋	29枚	26枚
---------	-----	-----	---------	-----	-----

情報の発信・共有

部会メンバーと利用者への情報提供

情報共有・提示

- 個人の「出来ること」を知る
- 登山道全体の詳細な情報提示
- 国立公園に関わる全般的な情報の共有
- 情報交換会にとどまらず、他団体へのアドバイスが出来る環境
- 危険箇所周知と情報共有
- 登山者に対しての登山道利用マナーの指導をどうするか考えるべき
- 各自が何が出来るか、出来ることの共有
- 登山道に関する情報提供・収集
- 自己紹介・交流（何を担当している人？どんな人？か分からない）
- 情報を収集し、利用者に対しての情報提供
- 団体間の意見交換
- 情報収集・提供

外国人観光客について

- 外国人や一般利用者への情報提供（見頃・見所・危険箇所等）
- 外国人対応
- 外国人に対応できる共通の認識・システムの形成

情報の内容

- 利用者へのサービス向上（トイレ・道標・案内板）
- ルートが長く、道のくずれが進んでいる
- 最新情報を共有するためのシステムづくり
- 登山道の状況毎の補修方法、技術
- 技術の発信（補修と復元は違う視点が必要）
- 山岳ガイドに対して登山道に関する幅広い調査（山岳ガイドの声＝登山者の声）
- 行政のHPの見直し
- 登山口までのアクセス→災害・不通→復旧の目安
- 大雪山グレード別の状況の共有化
- 山を良くするルートマップ作り

情報発信に関すること（利用者等へ）

発信する人・内容

- 登山道の荒廃の問題を利用者へ伝える
- 大雪山利用者に対する一元的な登山道情報の発信
- 環境保全をしないと観光は成り立たないと理解させる
- 国立公園指定の意義（保護と利用）に基づいて利用者に対する教育を如何にしたらよいか
- 登山道の整備が進むと時間の短縮が図れる
- 部会での内容を関係者以外の人々に伝える
- 一般登山者への広報
- 一般の方への情報公開

発信のアイデア

- 実施した事の可視化
- 部会としてのHPを持ち発信
- 登山者への情報源「見ため」一元化
- 富士山のようなイベント
- 情報の一元化
- 情報発信機能の強化

部会内での情報管理

課題の表明と対策実施の検証と公開制度

- 情報交換会以外での交流の場
- 行政担当者が引き継げる情報のまとめ
- 表大雪と東大雪の情報共有を密にする方策の実施
- メーリングリスト等ネットまたはメールで議論・情報共有できる仕組み
- 現場の詳細な情報

その他

- 提案に賛成します
- 各配布用印刷物の必要性の検討

人に関すること

広い視点・人材

- 観光セクターの積極的参加
- 全体をとらえる視点と多様な視点（観光サイド）
- 幅広い参加者やネットワーク
- 多分野の人材活用

限定的な視点・人材

- 民間のみにする
- （思い付きでない）科学的である人・自然

部会に必要な人材

- 主体となる人・機能
- メンバー高齢化対策と人材育成

組織・運営など主にソフト面に関すること

運営に関すること

- 管理運営の…コストを下げる、リスクを下げる、成果を挙げ、安定した体制を整える…方策を考えたい
- スピード感のある意志決定機能
- 内容も大事だが、時期を早く、時間を十分にとって欲しい
- 合意形成→素案作り、意思決定（管理者）、実施（各団体）という機能
- 維持管理の実働部隊は民間ボランティアの活用は絶対必要になるのでその組織化や活用方法の標準化
- 楽しさ
- 話しやすい雰囲気

部会の開催回数と時期

- シーズン中ごろの情報交換
- 年2回だけでなくシーズン中も情報を共有し合う事
- 部会の回数を増やす（中間で）

部会での決め事

- 組織としての確立。代表者を定める、規約を設ける等
- 組織・規約・代表者・事務所
- 一定のメンバーと決め方のルール

理念・目的・方針とその議論

目的・方針の共有や議論

- 部会として大連協総会に参加し、「山」の現状を問題提起する
- 「広く大雪山としての方向」、「詳細は現場としての視点」の双方を踏まえて
- 各登山道のあるべき姿、「美しくない」という共通認識
- 目的共有
- 大連協メンバーへの問題や情報の提示
- 大雪山全体をどうしていきたいのか、どうなるべきかの共有

理念

- 大雪山としての夢と目標を語る場にすること
- 愛
- 何を実施したいか？夢を語る
- 山を子孫にいい形で引き渡す
- 理念を語る

部会で扱うテーマの種類、部会の組織の設定

- 登山道維持管理部会ではトイレ問題も扱う事を明記すべき
- 案内看板少ない（途中で不安になる）
- 避難小屋の更新に関わって欲しい
- トイレ問題に関わってほしい
- 野営指定地、避難小屋、トイレの維持管理
- 野営場が少なく安心できる場所がない
- 山小屋の維持管理、更新も含めたビジョン作成
- トイレの老朽化が激しい。早目に利用者数データを把握すべき

外部組織との関係

部会などの権限と対行政に関すること

権限

- 確約書の権限を超越した維持管理権限
- 登山道毎の利活用の想定または立ち入り禁止区域など
- 総合型協議会からの一定の独立性
- ある程度の権限
- 大雪の事は登山道維持管理部会に聞くとよい
- この場で決定できる

未執行区間

- ガイドブックに載っている登山道が誰も管理していないとは一般登山者は知らない。未執行区間の解消は一刻も早く

組織間の調整

- 管理者同士の調整と決定
- 行政機関との協定
- 各機関との調整役
- 行政と山岳会の関係

部会での課題解決

行政手続きの簡素化や相互理解

簡素化

- 登山道整備での土地借用手続きの簡素化
- 許認可の簡素化

相互理解

- 関係行政機関に理解を求める必要が先ではないのか
- 行政体制（市町村）の対応
- 管理者の違いや重複により動められないことの調整
- 総合型協議会の中での登山道の問題の位置づけ→特に市町村長などメンバーがどのような意向を示すか

課題の洗い出し・その共有及び優先付け

課題の洗い出しと優先順位付け

- 課題に優先順位づけ
- ①短期的課題と②長期的課題の吟味
- 路線別に優先順位を決めて協働整備
- 現在一番補修が必要な箇所の見学（認識の一致を）
- 登山道整備の優先順位とレベル
- 課題に優先順位をつける
- ある程度長期スパンで登山道整備計画を作る
- 気になっている場所の出しあいと相談し合い
- 長期的、短期的な課題の洗い出し
- 登山道の課題の洗い出し

課題の洗い出しと共有

- 部会メンバーによる定期的な登山道の現地調査→課題と解決の方向性の共有化
- やったこと、やることの報告だけでなく、心配や問題を出しあう事
- 自分の団体の仕事として抱え込まずにみんなで相談し合う事
- 各自の活動の具体的な結果と改善点、これから予想されることとの共有
- 登山道情報の収集・蓄積・公開（例：荒廃状況データや計画）に向けてのソフト面・ハード面の充実
- 課題の洗い出しと共有
- 課題を解決する具体的な話し合いの場とする
- 登山道の崩壊により（山麓の人々が）どう影響がでるのか
- 登山道整備の人材確保

課題解決の進め方（PDCAサイクル）

- 今までの方針や計画の見直し
- モニタリングと検証
- 登山道と遭難等の関係や道の性質による人の流れの検討
- 今まで通りでは前に進めない。先ず作る・動く。整ってからでは遅い
- 問題の収集と蓄積の機能
- 問題の解決方法の検討とスケジュール作り
- 完成したものでなくて良い、PDCAで変化できる体制を
- 日々のデータ、専門知識、科学的分析
- 継続的なモニタリング
- 調査に対する様々な支援
- 登山道の維持管理に関する問題点の集約→解決に受けた計画策定

資金に関すること

- 林道を直すお金
- 手弁当・ボランティアだけでは活動に限界。ある程度の予算が必要
- 使えるお金
- 環境保全に関わる予算確保をする
- 事業予算を持つことの検討
- お金
- 予算。先ずは大連協の中で独自の収入を検討→大雪山協力金

大雪山国立公園フォーラム 新たな管理運営体制で世界に誇れる山岳国立公園を目指す
～妙高戸隠連山・尾瀬の協働型管理運営体制に学ぶ～（案）

主催：大雪山国立公園連絡協議会、北海道地方環境事務所

日時：平成31年1月28日（月） 14:00～17:00

場所：旭川大雪アリーナ多目的ルーム（北海道旭川市内）

目的：大雪山国立公園が抱える諸課題を解決するため、新たな協働型管理運営体制を構築することについて、妙高戸隠連山国立公園や尾瀬国立公園の事例を学び機運を醸成するとともに、大雪山国立公園にふさわしい体制を考えるもの。

対象：大雪山国立公園における総合型協議会準備会参加者及びその他山岳関係者（一般公募も行う。）

<プログラム>

1. 開会
2. 趣旨説明「大雪山国立公園の協働型管理運営体制構築を目指して」
環境省上川自然保護官事務所
3. 妙高戸隠連山国立公園の協働型管理運営体制の事例
4. 尾瀬国立公園の協働型管理運営体制の事例
5. パネルディスカッション「大雪山国立公園で目指す協働型管理運営体制について」
6. 閉会

